平成４年度

市原市内遺跡発掘調査報告

姉崎東原遺跡Ｄ地点

江子田送り神塚

大厩鍛冶屋前台遺跡

1993・3

市原市教育委員会

序　　文

市原市は、昭和38年に市制を施行して今年で30周年となります。

この間、首都圏に位置することから、ここ20年の間に急速に都市化が進み、これに伴う住宅建設、土地区画整理事業、道路整備等の都市基盤整備が積極的に進められてきました。

このような開発はよりよい生活環境を提供するものでありますが、その反面、祖先が残してきた貴重な文化遺産である遺跡と重複することがあり、文化財保護と開発との調和をはかる必要がたえず生じてきます。今回、ここに報告する調査は国庫・県費の補助を受け、開発との調整をはかるべく調査を実施し、遺跡の性格などを把握することができました。本書は、その成果をまとめたものであり、文化財の啓蒙と普及に広く活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査を実施するにあたり、ご指導、ご協力を賜りました文化庁・千葉県教育庁文化課・財団法人市原市文化財センター並びに関係機関に対して心より感謝を申し上げる次第であります。

平成5年3月

市原市教育委員会
教育長　植　草　久　善

例　　言

1　本書は国費および県費の補助を受けて、市原市教育委員会が主体と成り実施した、市内に所在する発掘調査の報告書である。

2　発掘調査および整理事業は、文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会で行った。

3　今年度実施した発掘調査は、下記の通りである。

(1) 姉崎東原遺跡D地点(調査コード・セ156)市原市姉崎東原2713－1

調　　査　個人のアパート建設に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の規模、状況等を把握した。調査対象面積635㎡のうち100㎡について確認調査を実施した。

調査期間　平成4年7月21～8月3日

(2) 江子田送り神塚(調査コード・セ157)市原市鶴舞1,158－2～3

調　　査　個人の住宅建設に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の本調査を実施した。調査対象面積300㎡のうち210㎡について本調査を実施した。

調査期間　平成4年8月4日～9月16日

(3) 大厩鍛冶屋前台遺跡(調査コード・セ162)市原市大厩字鍛冶屋前台990

調　　査　個人の宅地開発に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の規模・状況等を把握した。調査対象面積2,971㎡のうち290㎡について確認調査を実施した。

調査期間　平成4年10月5日～10月21日

4　本書の原稿執筆は、浅利幸一が行った。

5　本書に使用した地形図は、市原市発行の1：10,000(2・4・8の昭和55年経年変化修正)・1：2,500(姉崎はF3・江子田はK6・大厩はB6の昭和60年)を使用した。

6　本書に使用した方位は、姉崎東原遺跡D地点は座標北、江子田送り神塚・大厩鍛冶屋前台遺跡は磁北を示し、高さは東原が標高、江子田・大厩は遺跡内に任意に設定した標高からの高さを示すこととする。

本 文 目 次

序　文
例　言
第1章　はじめに …… 1
第2章　姉崎東原遺跡D地点 …… 1
第3章　江子田送り神塚 …… 10
第4章　大厩鍛冶屋前台遺跡 …… 18
第5章　ま と め …… 24

挿 図 目 次

姉崎東原遺跡D地点

第1図　姉崎東原遺跡D地点の位置および周辺の遺跡分布図 …… 2
第2図　姉崎東原遺跡D地点調査範囲と周辺地形図 …… 2
第3図　姉崎東原遺跡全体図 …… 3
第4図　姉崎東原遺跡D地点全体図 …… 4
第5図　トレンチ土層断面図 …… 5
第6図　001号跡周溝状遺構 …… 6
第7図　002号跡住居跡 …… 7
第8図　002号住居跡内ピット …… 8
第9図　姉崎東原遺跡D地点出土遺物 …… 9

江子田送り神塚

第10図　江子田送り神塚の位置および周辺の遺跡分布図 …… 11
第11図　江子田送り神塚調査範囲と周辺地形図 …… 11
第12図　送り神塚現況地形測量図 …… 12
第13図　盛土地形測量図および盛土出土遺物 …… 13
第14図　盛土土層断面図 …… 14
第15図　盛土下層遺物出土状況 …… 15
第16図　盛土下層出土遺物 …… 17

大厩鍛冶屋前台遺跡

第17図　大厩鍛冶屋前台遺跡の位置および周辺の遺跡分布図 …… 19
第18図　大厩鍛冶屋前台遺跡調査範囲と周辺地形図 …… 19
第19図　大厩鍛冶屋前台遺跡全体図 …… 20
第20図　トレンチ土層断面図 …… 21
第21図　大厩鍛冶屋前台遺跡出土遺物 …… 22

図　版　目　次

図版 1　姉崎東原遺跡D地点
図版 2　姉崎東原遺跡D地点と出土遺物
図版 3　江子田送り神塚
図版 4　江子田送り神塚と出土遺物
図版 5　江子田送り神塚出土遺物
図版 6　大厩鍛冶屋前台遺跡
図版 7　大厩鍛冶屋前台遺跡と出土遺物

表　目　次

第 1 表　江子田送り神塚盛土下層出土カワラケ計測表
第 2 表　大厩鍛冶屋前台遺跡トレンチ計測表

第1章　は　じ　め　に

市原市内には、昭和62年度の調べで982箇所以上の遺跡の存在が知られている。近年首都圏のベットタウンとして市街化が急速に進行した当市では、都市基盤整備に伴う公共事業や民間の大規模開発の他、多くの開発行為が進められてきた。また、これらの開発に伴う埋蔵文化財調査件数も年々増加の傾向にある。

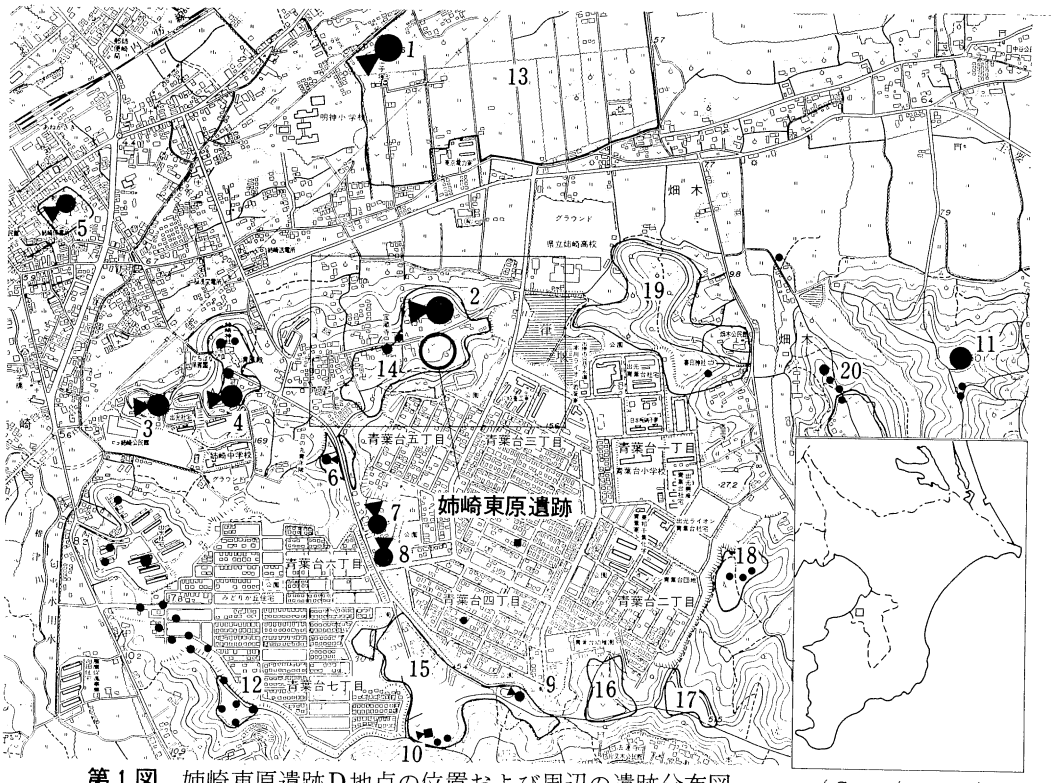
このような状況の中、当市に於いても昭和62年度より埋蔵文化財の保護の観点から調整を計る必要上、国費・県費の補助を受けた市内遺跡調査を実施してきた。昭和62年～平成3年度までの市内遺跡調査実績の費用・調査件数は、以下の通りである。昭和62年度4,000,000円・4箇所、昭和63年度5,000,000円・4箇所、平成元年度5,150,000円・4箇所、平成2年度8,034,000円・6箇所、平成3年度4,532,000円・3箇所である。

今年度の市内遺跡群調査は、姉崎東原遺跡D地点・江子田送り神塚・大厩鍛冶屋前台遺跡の3箇所の調査を実施した。延べ調査面積は600㎡である。東原遺跡D地点は個人のアパート建設、送り神塚は個人住宅建設、大厩鍛冶屋前台遺跡は個人の宅地開発に、それぞれ伴う調査である。このうち江子田送り神塚は、当初は江子田古墳群(13号墳)として調査を実施したが、調査により近世の『塚』であることが明らかとなったので、当地の小字名から本書では『送り神塚』と呼称することとした。

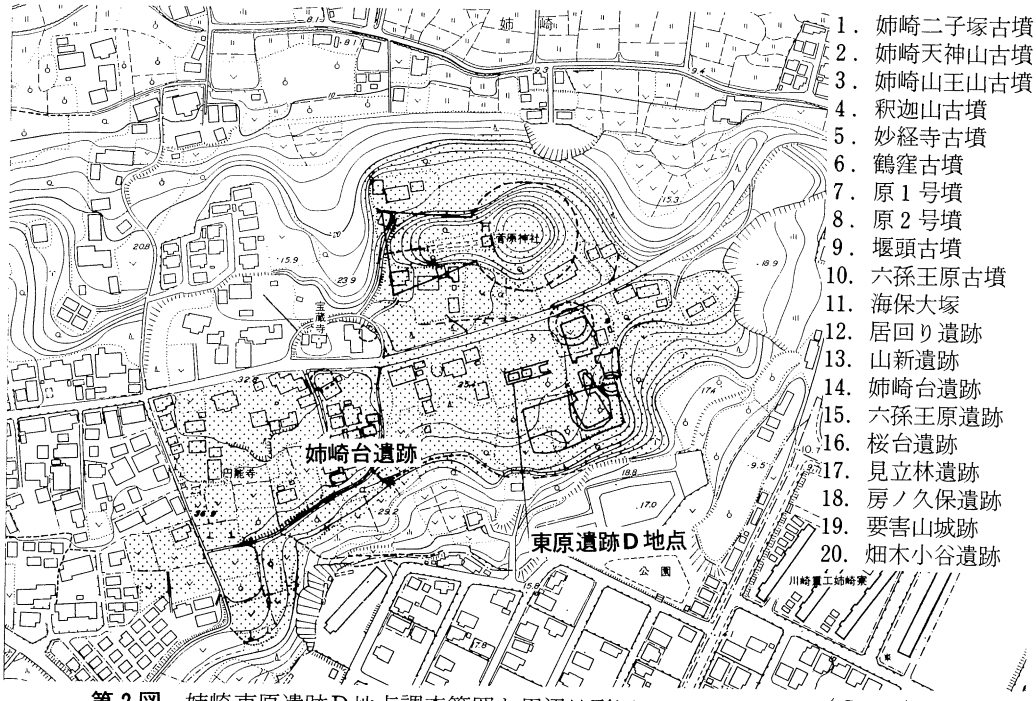
第2章　姉崎東原遺跡D地点

姉崎東原遺跡は、県下でも有数の規模を誇る大型前方後円墳の存在で知られる姉崎古墳群中の一角に在り、市内最大級の前期前方後円墳として知られる姉崎天神山古墳南側に隣接し所在する。この地域は市原市遺跡台帳によると、姉崎台遺跡として周知され、姉崎東原遺跡は天神山古墳を含めた台遺跡の東半分にあたる地域である。この東原遺跡では、昭和62年にA地点の確認ならび本調査[1]、平成2年にB地点確認調査、今年度にB地点本調査を実施している[2]。

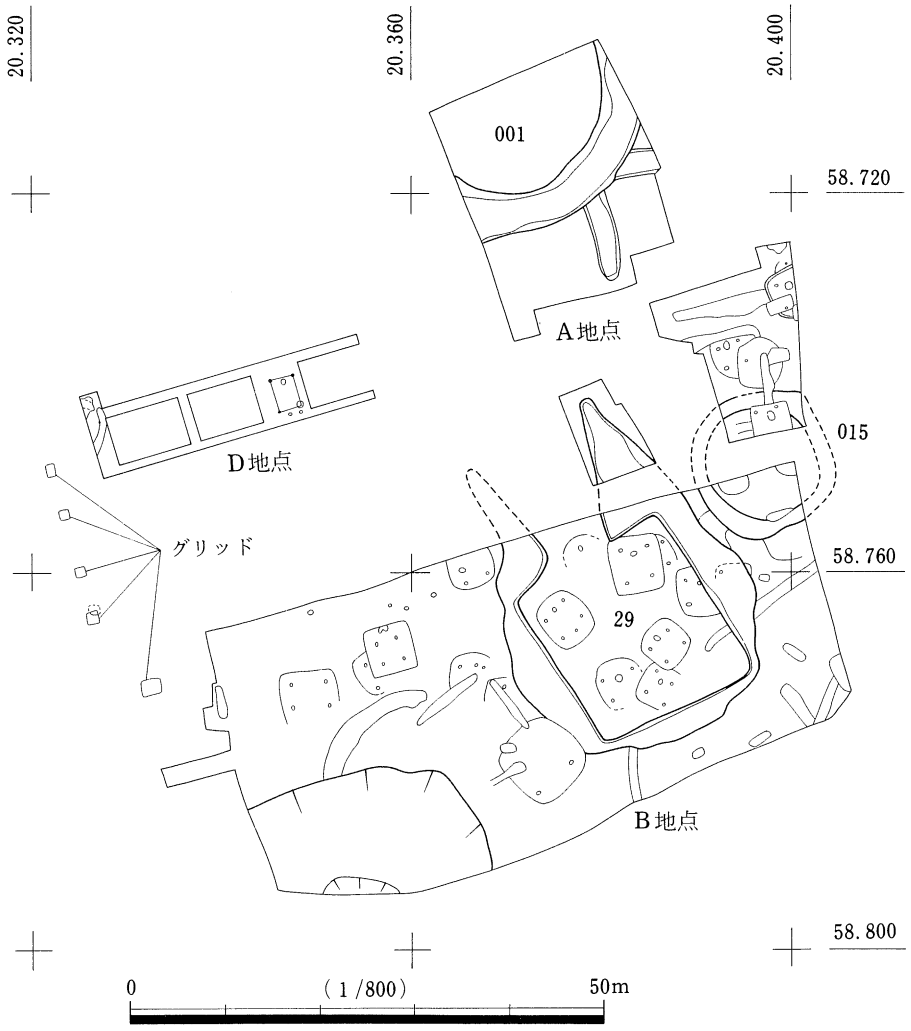
これまでの調査では、弥生中期～後期の中期宮の台に主体を置く集落跡の他、前方後方墳・円墳・土壙・溝などを検出している。これまでに調査された古墳は何れも墳丘を削平され盛り土は失われている。平成2年度調査の円墳001号は1/4ほどの検出であるが墳丘径約20m・周溝幅4mを測り、市道の下にあり調査の実施されなかった北側周溝部分は天神山古墳の後円部周溝と切り合う関係にある。平成2年度と4年度にまたがり調査の実施された円墳015号は墳丘径12m・周溝幅1.5mを測り、出土遺物からの時期限定は不明とされている。29号跡の前方後方墳は平成2年度の調査では、その前方部の一部の調査が実施され、4年度の調査で前方後方



第１図　姉崎東原遺跡Ｄ地点の位置および周辺の遺跡分布図　（Ｓ＝１/20,000）



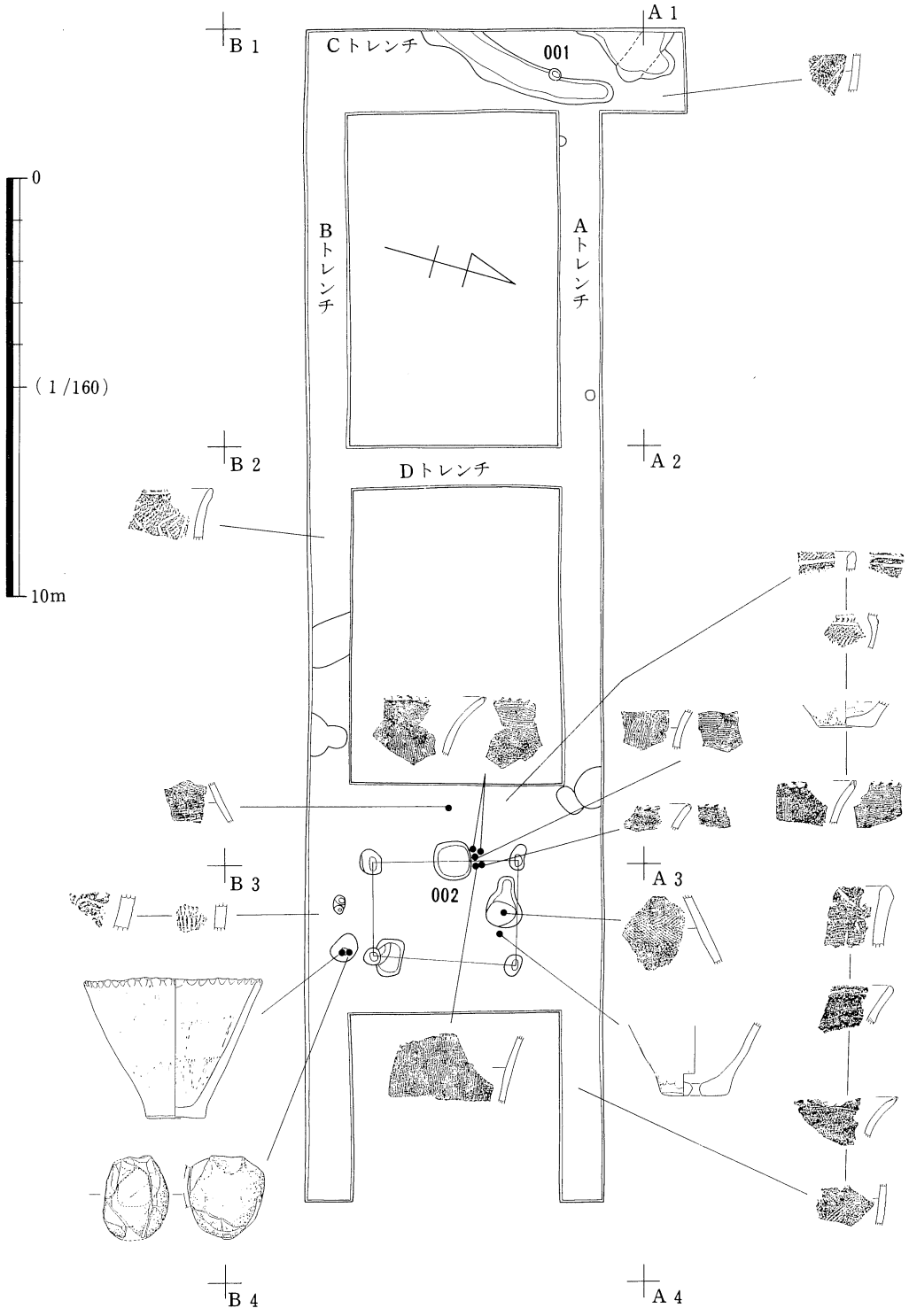
第２図　姉崎東原遺跡Ｄ地点調査範囲と周辺地形図　（Ｓ＝１/5,000）



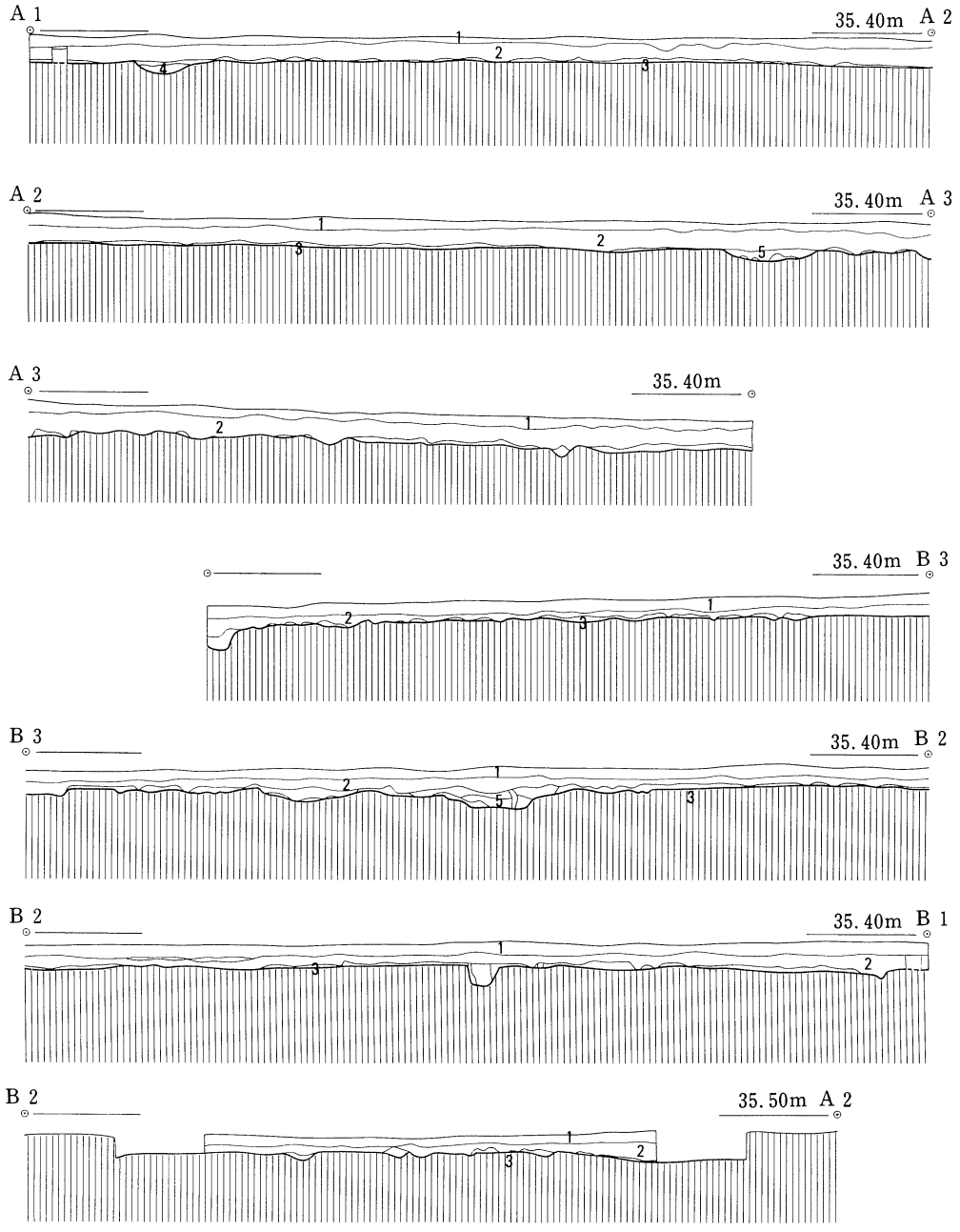
第3図　姉崎東原遺跡全体図

墳として遺構の性格が確認されたものである。主軸長約34m・後方規模約19mを測り、周溝内出土遺物から四世紀後半とされ、天神山古墳との時期的な問題で注目される。

D地点調査区域は、これまで調査の行われた逆Lの字形に設定されたA・B両調査区の内側の一部を占め、調査前は畑地であった。天神山古墳墳丘裾までの距離は、隣接する畑地・市道を挟んで60mの至近距離に位置し、標高35.3m前後を測る。調査は、調査対象地内に私道・駐車場が設けられ調査区域が制約され東・南側が除かれた。調査可能な地域内に南北に5mの間を置き長さ28m・幅1mのA・Bの2本のトレンチを東西方向に設定し、必要に応じて拡張することとした。検出した遺構は、西端の周溝状遺構001号跡、東側に住居痕跡の002号跡がある。その他は、耕作に伴う撹乱穴などが若干見受けられる程度であった。



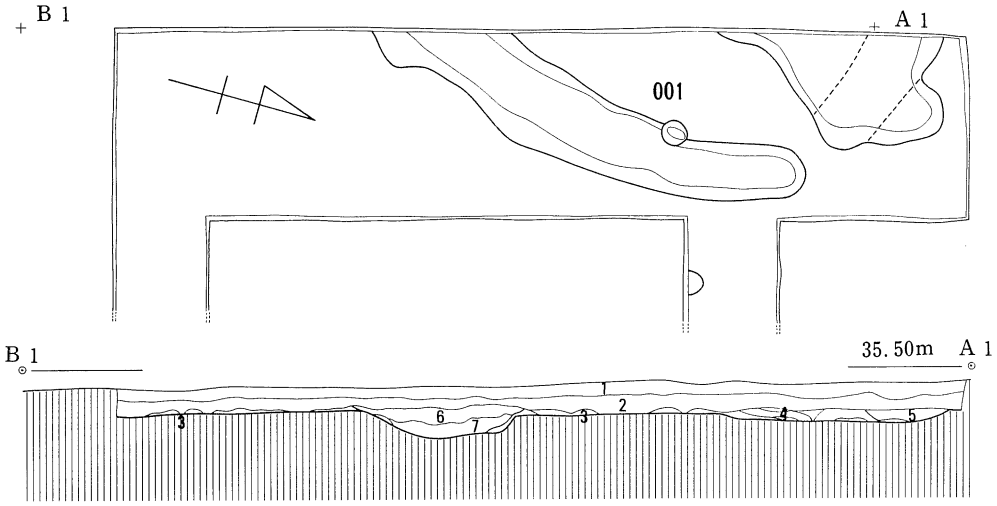
第4図　姉崎東原遺跡D地点全体図



トレンチ土層
1．淡黒褐色土層　畑地耕作土および表土
2．淡黒褐色土層　旧畑地耕作土・若干のローム粒子を含む
3．淡黒褐色土層　撹乱土層・小ロームブロックを含む
4．黒　色　土　001号溝覆土・黒色土に若干の褐色粒を含む
5．暗茶褐色土層　撹乱土層・ロームブロック土層

0　(1/80)　5 m

第5図　トレンチ土層断面図



B 1 − A 1
1．淡黒褐色土層　畑地耕作土および表土
2．淡黒褐色土層　旧畑地耕作土・若干のローム粒を含む
3．淡黒褐色土層　撹乱土層・小ロームブロックを含む
4．黒暗褐色土層　落込み覆土・黒色土に若干の褐色粒を含む
5．黒 色 土 層　溝覆土・黒色土に小量の褐色粒を含む
6．黒 色 土 層　溝覆土・黒色土に若干の褐色粒・褐色ブロック土を含む
7．暗茶褐色土層　溝覆土・褐色土に若干の褐色ブロック・ローム粒を含む

0　(1/80)　5 m

第6図　001号跡周溝状遺構

地表面から遺構確認面までは、0.2〜0.3mと浅く、基本土層は2層に分けられる。1・2層とも耕作土で、遺構確認面は、ハードローム面の露出するほどに上層部のソフトローム面が削平されたローム面である。したがって、出土遺物も耕作により摩滅した小破片が大半を占める。

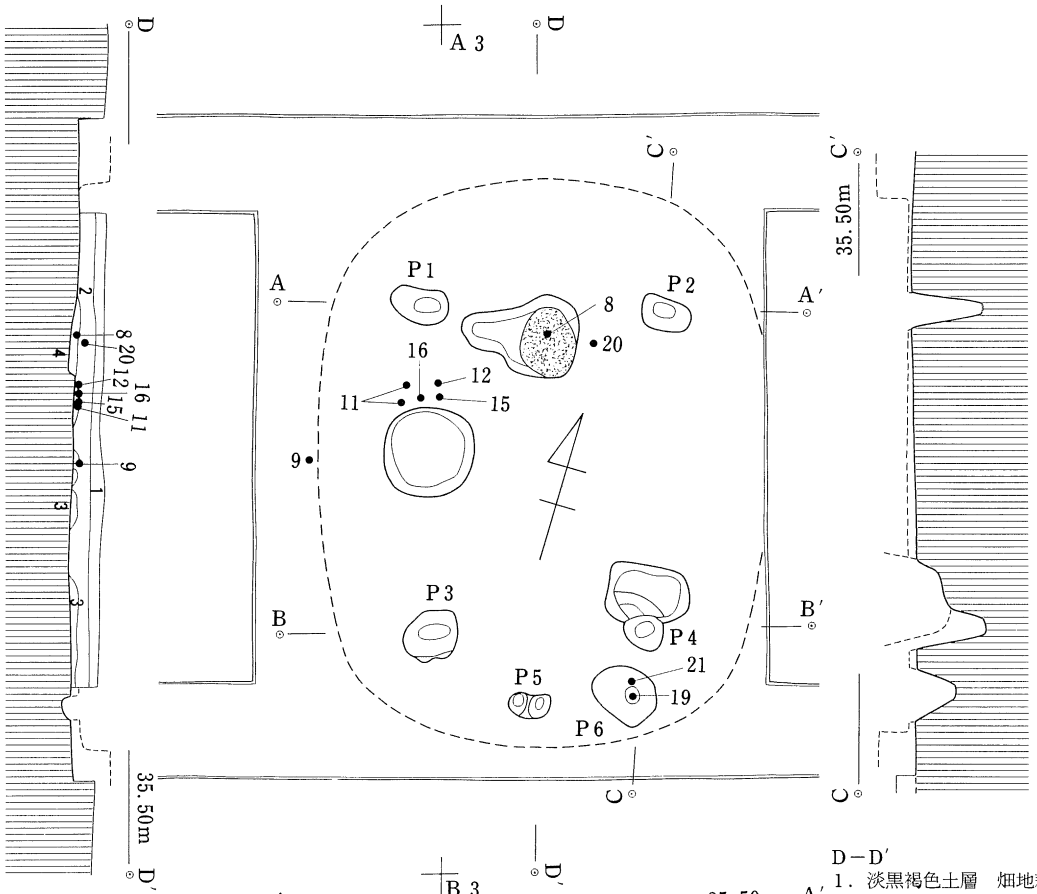
001号跡　周溝状遺構

調査区の西端より検出し、大半は調査区域外にあり、正確な形状・規模は把握できない。また、出土遺物も小片のため時期限定が困難な遺構である。

東溝は弧状を呈し、検出長4.8m・幅0.6〜1m・深さ7〜25cmを測る。北溝は不整形の落込みと切り合い、黒色土主体の土層状況から不整遺構を掘込んでおり、検出長1.5m・幅0.7m・深さ10cm前後を測る。この北と東側溝が同一遺構と考えると、隅にブリッジを有する方形周溝遺構が想定でき、外径規模で7mほどの復元となる。

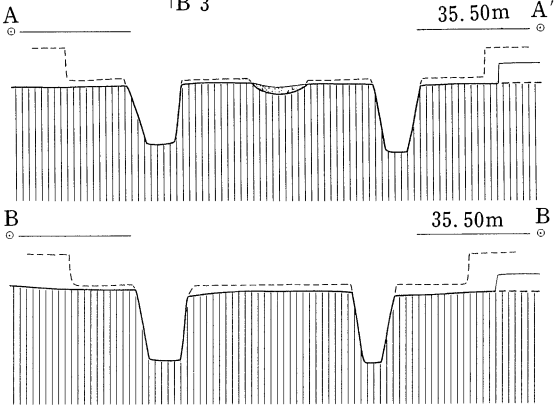
002号跡　住居跡

調査区東側に、床面および壁面は撹乱により削平さるものの、炉跡・主柱穴・出入口関連ピット・胞衣ピットから構成される住居跡痕跡を検出した。P(ピット)7・P8は近世のイモ穴である。主柱穴間はP1〜P2が2.48m・P1〜P3が3.45m・P2〜P4が3.36m・P3〜P4が2.21m、深さはP1が67cm・P2が75cm・P3が73cm・P4が74cmを測る。ピット形状は、主軸に直行して長軸を置き楕円形となる。P5は出入口施設に伴うピットで、二つの底面を有し深さは14〜16cmを測る。P6は、胞衣ピットとして理解できる遺構で平面形がほぼ楕円で、規模は確認面66×53cm・



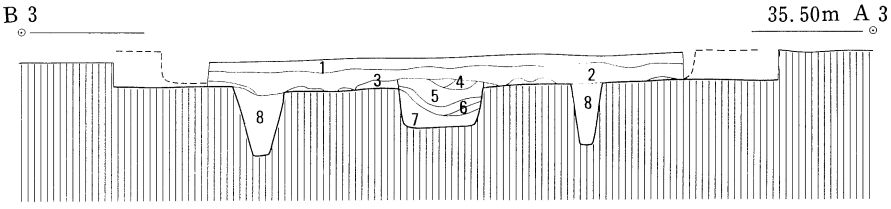
B 3－A 3

1．淡黒褐色土層　畑地耕作土および表土
2．淡黒褐色土層　旧畑地耕作土・若干のローム粒を含む
3．淡黒褐色土層　撹乱土層・小ロームブロックを含む
4．暗褐色土層　イモ穴覆土
5．暗茶褐色土層　イモ穴覆土・ローム粒ロームブロック土層
6．褐色土層　イモ穴覆土
7．暗茶褐色土層　イモ穴覆土・ロームブロック土層
8．茶褐色土層　住居跡柱穴覆土



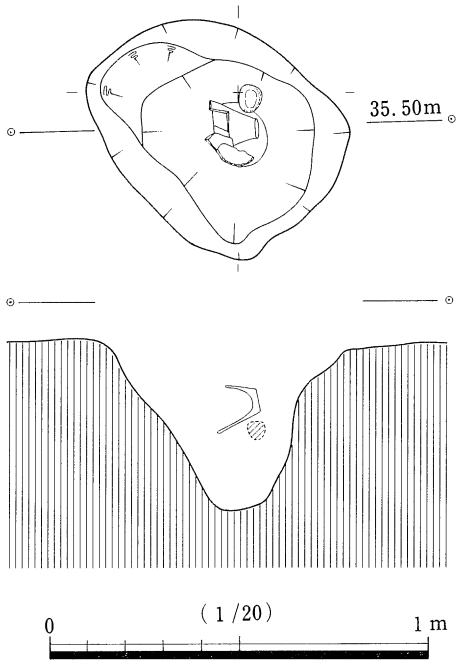
D－D′

1．淡黒褐色土層　畑地耕作土および表土
2．淡黒褐色土層　旧畑地耕作土・若干のローム粒子を含む
3．淡黒褐色土層　撹乱土層・小ロームブロックを含む
4．黒褐色土層　炉跡・焼土粒子焼土塊を含む



第７図　002号跡住居跡

0　(1/80)　5 m



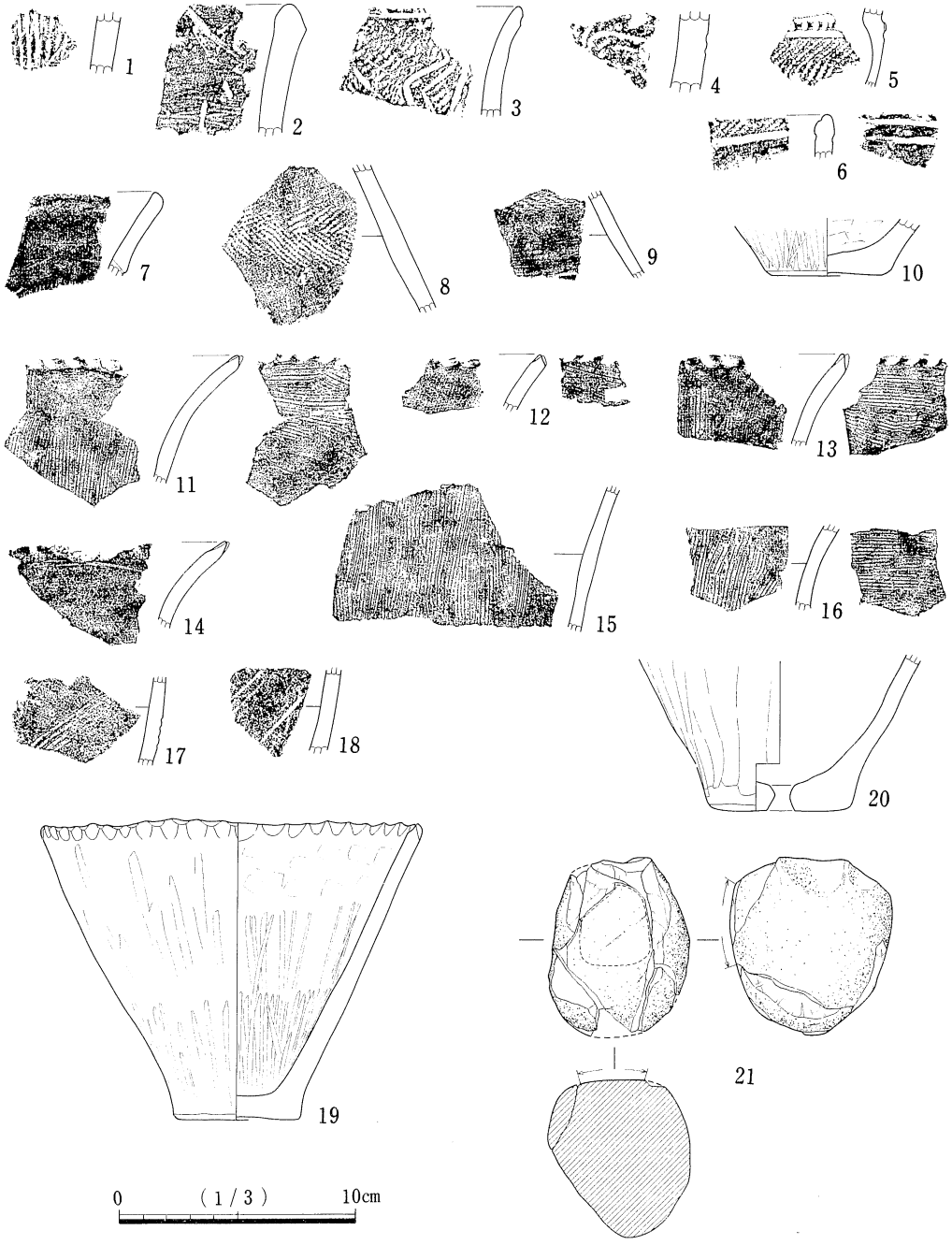
第8図　002号跡住居跡内ピット

底面18×13cm・深さ44cmを測り、断面は片側に段を有する深鉢状を呈する。ピット中には、深鉢19と敲打痕と磨耗痕の残る石器21を覆土中層に検出した。炉跡の位置は主柱穴P1・P2をむすんだ内側に付設され、規模71×60cmで7cmほどの焼土が堆積する。床面は削平され、確認面直上に床面硬化土の痕跡が僅かに見られるだけである。壁面も床面同様削平され痕跡をとどめないが、図上で平面規模把握のため破線で復元を試みると、長軸長6m・短軸長4.8m・主軸方位N－17°－Wを指向する。002号出土遺物は、図示した8・9・11・12・15・16・19～21があり、これらの出土遺物ら弥生中期後半に比定できる。

出土遺物

姉崎東原遺跡D地点の調査では、表土層が耕作により撹乱されるため表土層中の遺物の多くが摩滅し図示できるものは僅かであった。1は、条痕文系の繊維混入土器で、縄文早期の茅山式土器であろうか。2は、口縁部破片で無文で、下半には強い磨きにより条線状の痕跡が見られる。3は、口縁部破片で、縄文地に口縁直下に沈線、胴部に横位連続山形の沈線文を施す。4は、体部小破片で、曲線の沈線を施す。2～4は何れも縄文後期堀之内I式の深鉢土器であろう。5は、体部小破片で、縄文地の上半に横位の沈線に区画された半切竹管の刺突を施す。6は、口縁部小破片で、口縁直下に縄文に沈線、内面にも沈線を施す。5・6は何れも縄文後期加曽利B式期であろう。

7～20は、弥生中期宮の台式期の土器である。7は、長頸壷口縁部の小破片で、口唇部先端に細縄文、破片下端部は有段で端部に細かな刻みを施し、内外面とも赤色を施す。8は、壷胴部の小破片で、1段の羽状縄文を施す。9は、壷口縁部破片と思われ上半に細縄文、内外面とも赤色を施す。10は、壷底部破片で外面磨き内面篦ナデ、外面に赤色を施す。11～14は、深鉢口縁部破片で、口唇部指頭押捺により波状を呈し、11～13の内外面には刷目を、14は内面光沢のある磨き、外面丁寧なナデを施す。15・16は、深鉢胴部破片で、丁寧な刷目を施す。17・18はやや器表面の風化した深鉢胴部破片で、17は4条、18は2条の平行沈線を施す。19は、今回の調査で唯一復元のできた深鉢で、住居跡P6から21の石器とともに出土した。口径15.6～16.1cm・底径5.4cm・器高12.8cmを計る。口縁部指頭押捺により波状を呈し内外面とも磨き状の



第9図　東原遺跡D地点出土遺物

篦ナデを施す。20は、甑底部破片で、底径6.3cmを計り、底部中央に両側穿孔の一孔を有する。21は、表面風化の著しい石器で敲打痕と磨耗痕を有し、5片を接合し一部を欠き、重さ370gを計る。

第3章　江子田送り神塚

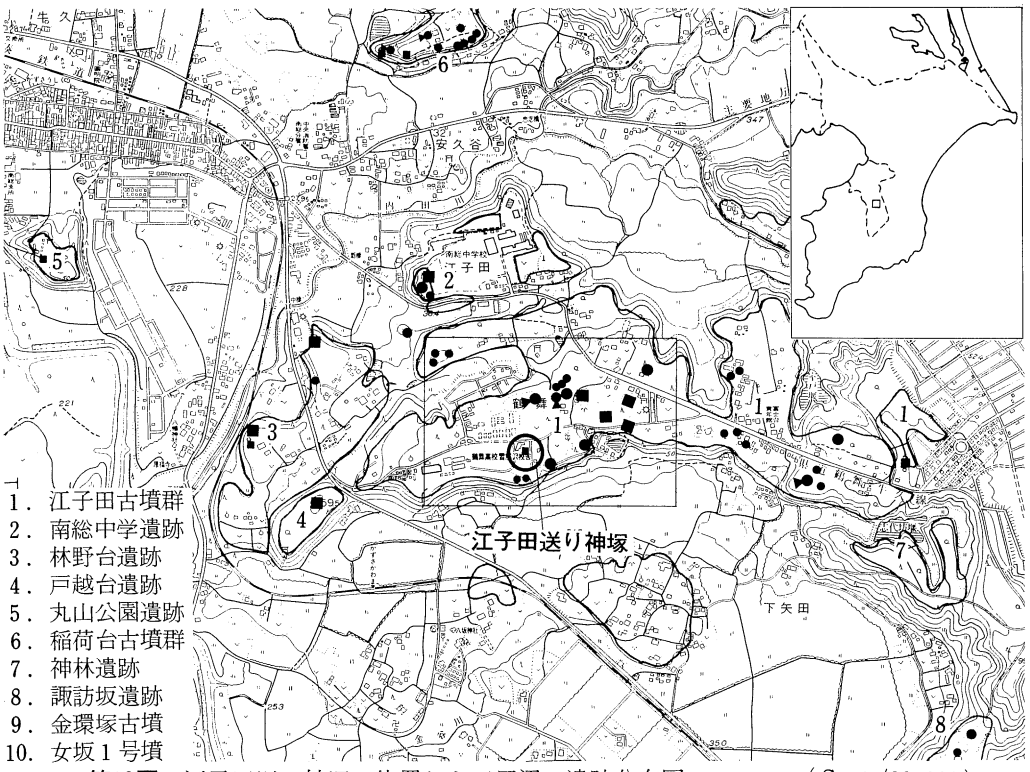
江子田送り神塚は、養老川中流域の最深部右岸に位置する江子田古墳群中の一角に所在し、今回の調査以前は市原市埋蔵文化財分布地図中で江子田13号墳と周知されていた古墳である。江子田古墳群は、古墳時代後期の当地域の盟主的地位と考えられる主軸長47mを測る二重周溝の前方後円墳で知られる金環塚古墳[3](江子田35号墳)を主墳とする。この金環塚古墳より東方90mには終末期方墳としては市内最大級クラスの一辺29m二段築成の女坂一号墳[4](江子田36号墳)が所在し、周辺には40数基ほどの古墳の存在が知られていたが、近年の宅地開発などにより失われた古墳も多い。また、小支谷を隔てた北側台地上には弥生中期の環濠集落跡・方形周溝墓などを調査した南総中学遺跡[5]がある。金環塚を含めたこの地域は、1984年に隣接する県立市原園芸高等学校グラウンド造成に先立ち、雪解沢遺跡[6]として墳丘の失われた金環塚古墳の再調査が実施された。この調査では、当初検出した周溝の他に、外側に更にもう一条の盾形の周堀が廻る二重周堀の形態をとることが確認された。また、古墳時代前期の方形周溝墓や弥生後期の集落跡の存在も明らかとなりつつある。

江子田送り神塚の所在するこの台地は、東に基部を有し西に舌状に延び、幅250m・長さ600m・標高63m前後を測る。塚はこの台地の養老川の開析した台地南側縁辺近くに面し、北側小支谷に面して築造された金環塚古墳より好適地に占地する。塚の現況は、個人の宅地内にあり庭に築山として存在していた。盛土と周辺の比高差は、最大で1.45mを測る。現況の平面規模は東西16m・南北19mを測り、やや南北に長い隅丸方形を呈する。築山には、植木が植えられ調査直前に移植され、やや荒れた状態にあった。

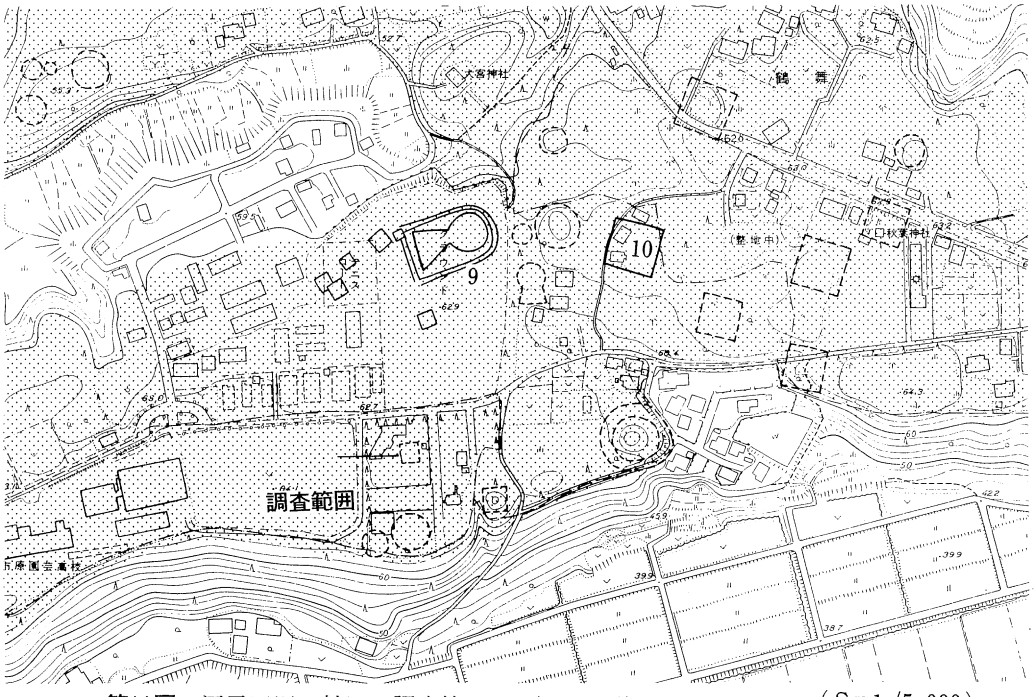
調査は、本塚が古墳であろうことを前提として行い、先ず樹木の移植により撹乱された表土層の地ならしの後地形測量を行い、盛土規模把握を目的としたトレンチ調査を実施した。トレンチは、磁北に合わ東西・南北に設定し、盛土裾部から可能な限り外に延長し、周溝等の施設の確認を試みたが、盛土外は宅地造成時に旧表も確認できないまでに大きく削平されていた。

トレンチ調査では、南・西側に、宅地造成時の撹乱および山砂等の客土を大きく認め、北・東では盛土の削平跡を確認したに留まるものの、東トレンチでは塚盛土部に獣穴か木の根によると思われる土層の乱れがあるものの、塚当初の盛土裾部の可能性のあることを確認した。

平面形は、周辺が宅地造成時に多きく削平されているため復元は困難であるが、比較的削平が少ないと思われる東側辺が直線的となること。また、南西部に客土した山砂が盛土隅で平面L字形を呈し、盛土隅が角状と成ることを思わせるように検出されること。この2点を考慮に入れると、塚の平面は方形を呈すると考えられる。平面規模は、一辺東西で13.3m・南北13m以上が推定可能である。



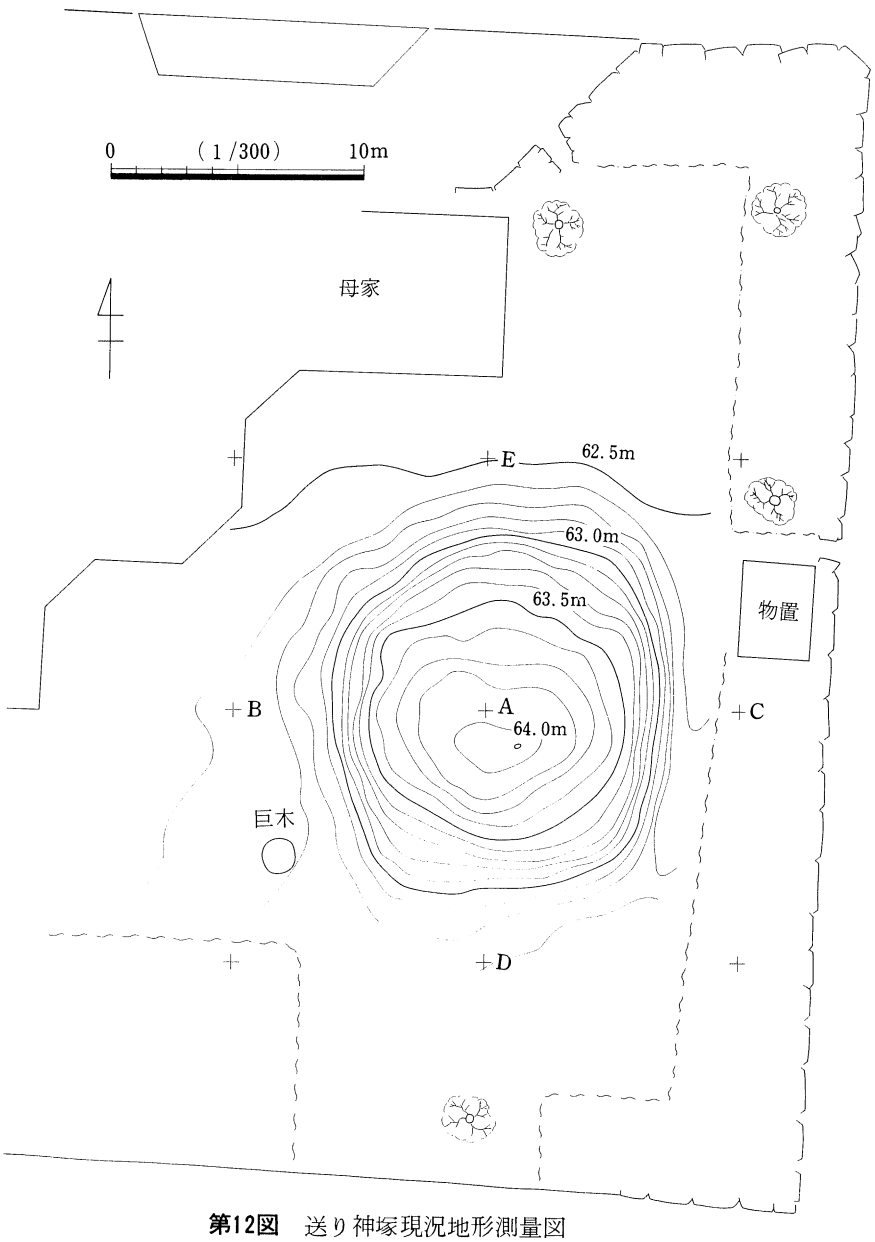
第10図　江子田送り神塚の位置および周辺の遺跡分布図　（S＝1 /20, 000）



第11図　江子田送り神塚の調査範囲と周辺の地形図　（S＝1 /5, 000）

盛土は宅地造成時の客土に覆われ、現況で最大1.45mを測り、頂上部の層位の新旧が不鮮明であるが、塚本来の盛土は旧表から1.1mを測る。

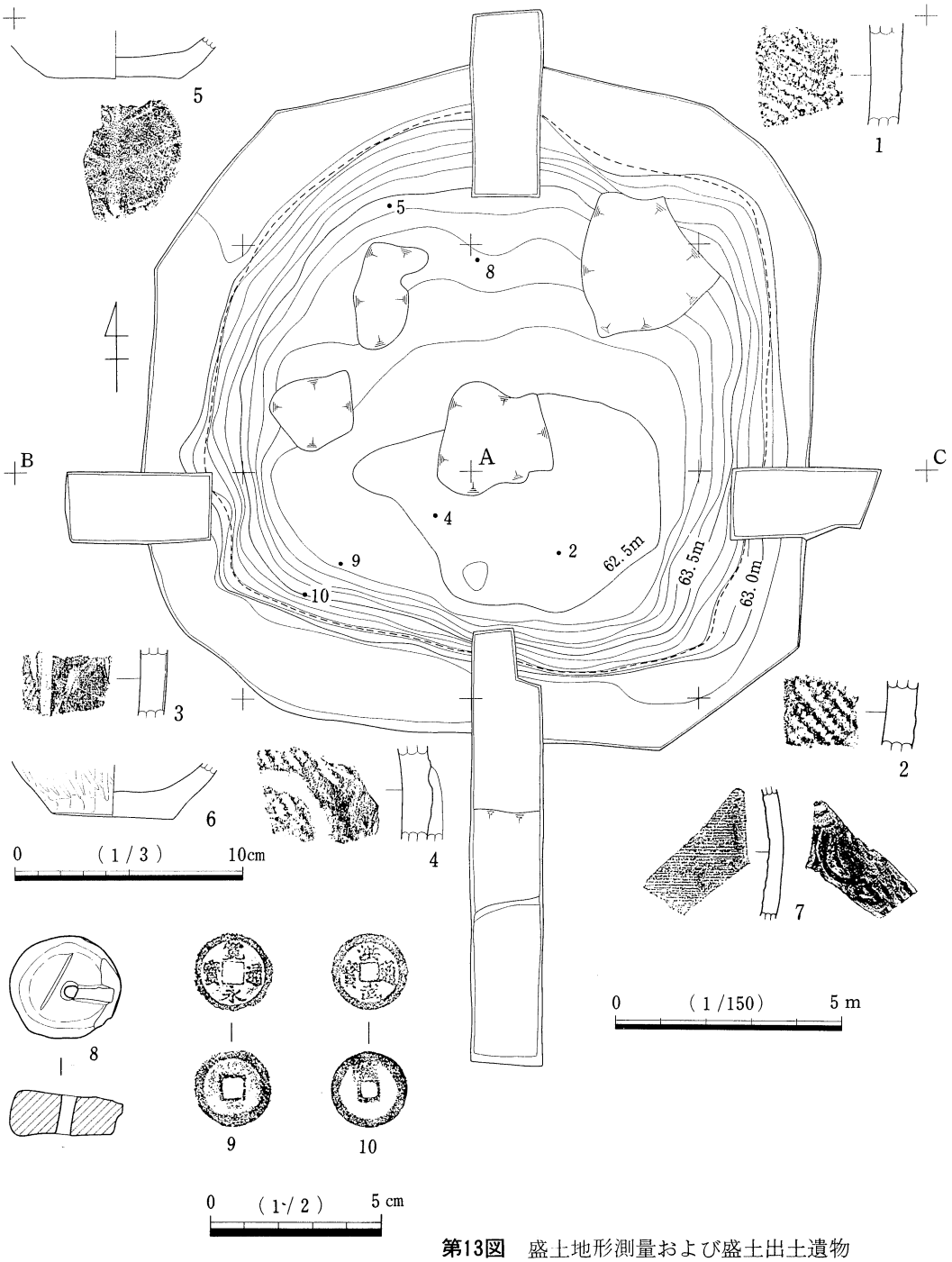
盛土土質は黒色土を主体に行われ、ローム土は土層断面図の西・南側上部に見られるだけで僅かである。盛土構築は、黒色土を主体とするため質差が明瞭に認められないこともあり比較的平端に行われているように看取される。盛土下には、旧表土が0.35～0.45mほど認められ、旧表下の地山ローム面は南が高く北が低い、北と南のローム面比高差は0.4mである。



第12図　送り神塚現況地形測量図

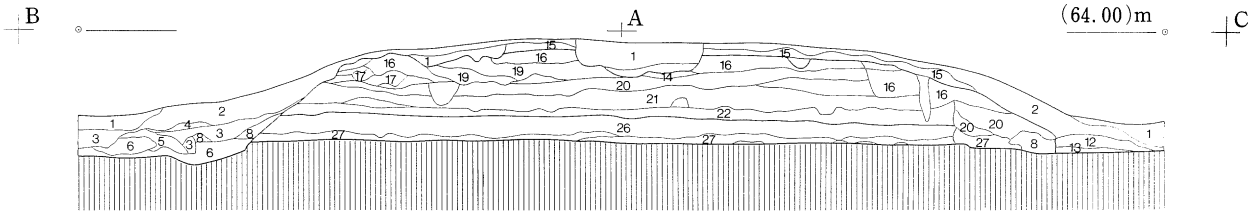
また、北側盛土最下層の旧表直上には護摩を炊いたと思われる祭祀痕跡が見られ、痕跡は径6mほどの不整形を呈している。この土層中から、祭祀に用いたカワラケ28個を検出する。出土状況から、14個ずつの2グループに分けられる。

本塚の構築方法を試みると以下のように推測される。先ず、場所の選定→規模に合わせた範

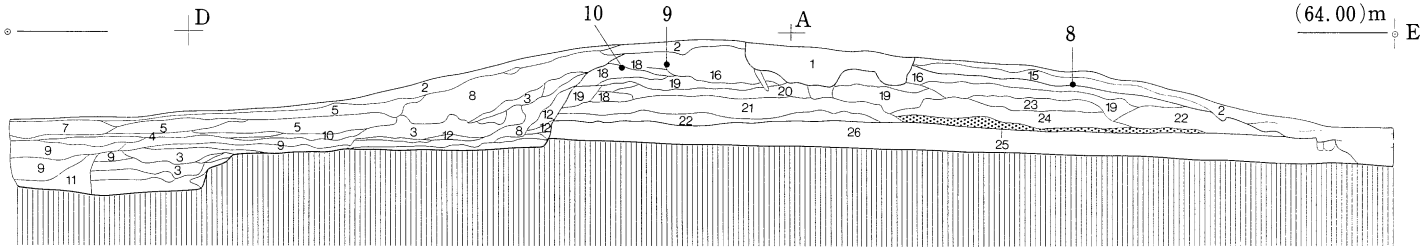


第13図 盛土地形測量および盛土出土遺物

囲の確定→構築範囲南半分に0.5mの土盛を行う。→北側で護摩をたき、カワラケ14個を用いた祭祀を2箇所で行う→祭祀跡の北側半分に南同様に0.5mの盛土を行う→北側から順次0.2～0.3mの厚さに盛土し、これを繰返して全体の盛土構築を行う。



盛土東西方向土層断面

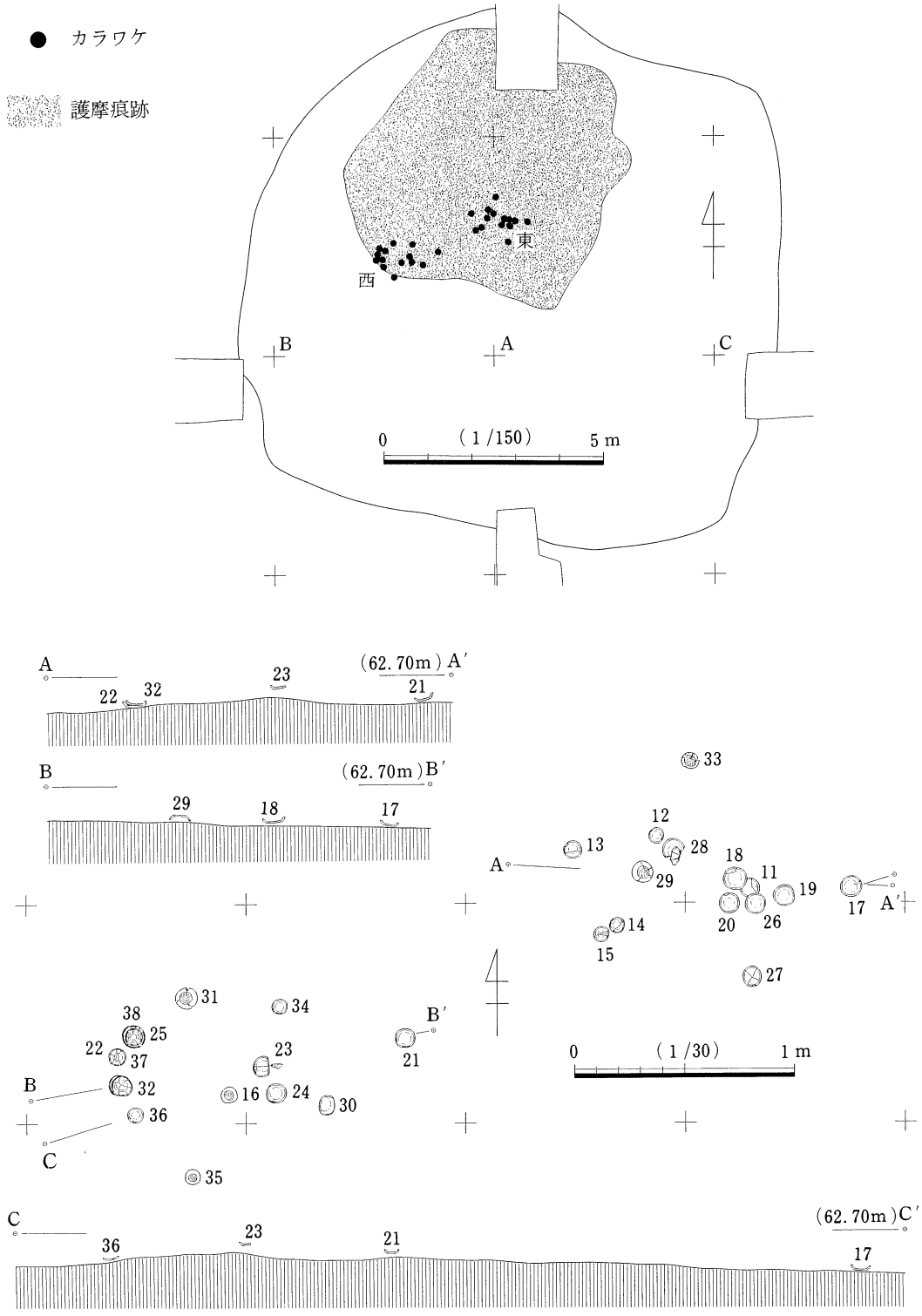


盛土南北方向土層断面

0 (1/125) 5 m

1．淡黒褐色土層　表土および撹乱土層
2．淡黒褐色土層　表土
3．淡黄褐色土層　山砂土層
4．淡黄褐色土層　山砂硬質（踏み固め）
5．淡暗黄褐色土層　山砂に黒褐色土混入
6．黄褐色土層　大ロームブロック土層
7．淡黄褐色土層　山砂とロームブロック混入土
8．黒褐色土層　ボソボソな軟質土層
9．暗青黄色土層　へどろ状の硬化土と山砂の混合土
10．黒黄褐色土層　山砂と黒色土混合土
11．暗青色土層　へどろ状の硬化土とゴミの混合土
12．黒褐色土層　やや軟質
13．暗黄褐色土層　ローム土撹乱土層
14．黒褐色土層　ローム土混入硬質土
15．黒褐色土層　表土直下土層
16．黒褐色土層
17．黄褐色土層　ロームブロック土を主体とする
18．黒褐色土層　若干の小ロームブロックを含む
19．暗黒褐色土層
20．黒褐色土層　若干の褐色ブロック土を含む
21．黒色土層
22．暗黒褐色土層　多量の暗茶褐色土ブロックを含む
23．暗黒褐色土層　若干の褐色ブロック土と暗茶褐色ブロック土を含む
24．暗黒褐色土層　23層に少量の焼土粒子を含む
25．暗黒褐色土層　24層に多量の焼土粒子を含む
26．黒色土層　旧表土
27．黒褐色土層　多量のローム土を混入

第14図　盛土土層断面図



第15図　盛土下層遺物出土状況

出土遺物

遺物は、盛土最下層から出土した11～38のカワラケ28点と盛土中の古銭８～10の他には、縄文･土師器･須恵器･礫などの破片が盛土中に散見される程度で僅かである。

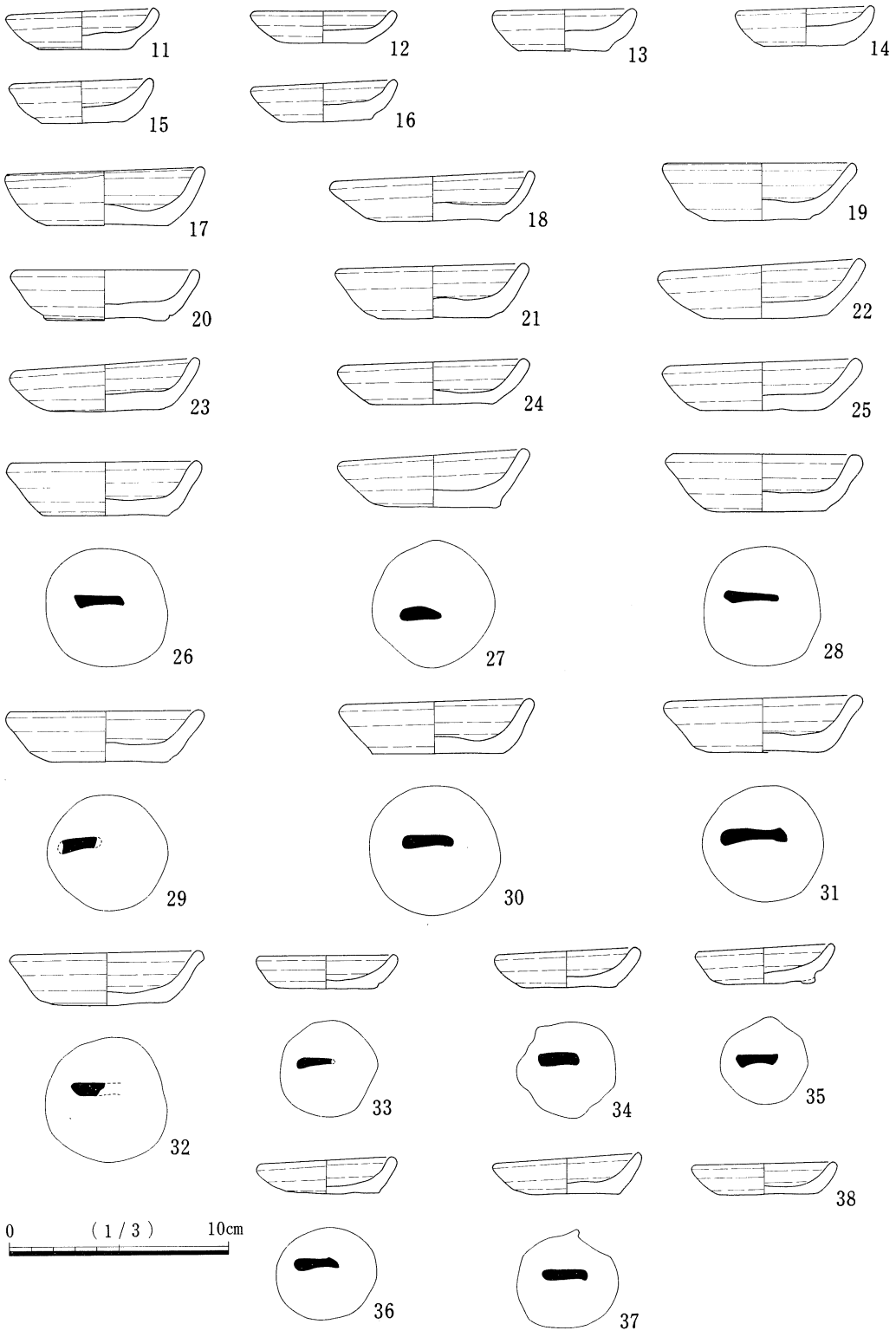
１～４は、何れも小破片であるが、縄文中期加曽利Ｅ式土器の深鉢土器であろう。５は、底部の小破片で底部に木ノ葉圧痕を残し内面磨きを施し、古墳前期の鉢形土器と考えられる。６は、外面磨き･内面篦ナデを施し、弥生後期～古墳前期の壷形土器と考えられる。７は、須恵器の小片で、外面カキ目･内面同心円文を施す、壷の胴部破片と思われる。

８～38は、塚に伴う遺物である。８は、盛土北側の旧表上0.8mから出土した、緡状の物で、５～６枚の古銭が紐で結いた状態にある。古銭名は錆がひどく不明で、径2.9cm･厚さ１～1.2cm･重さ25.2ｇを計る。９と10の古銭は、接近して出土した。９は、寛永通寶で周縁がやや欠け、裏面が摩滅している。径2.39cm･厚さ0.11cm･重さ1.9ｇを計る。10は、洪武通寶で裏面に湯こぼれがあるものの、径2.32cm･厚さ0.18cm･重さ3.5ｇを計る。

11～38は、盛土最下層の護摩痕跡土中から出土したカワラケである。出土範囲より２グループに分けられる。東側は、11～15･17～20･26～29･33。西側は、16･21～25･30～32･34～38の14点ずつ計28点である。この内、26～38の13点の底部には、『一』の字の墨書が描かれている。カワラケは、計測値から11～16(ａ)･33～38(ｂ)と、17～25(Ａ)･26～32(Ｂ)大小の２グループに分けられる。また、ａ･Ａの無墨書土器、ｂ･Ｂ墨書土器にも別れる。ａ･ｂの小型は口径6.3～７cm･底径４～4.7cm･高さ1.5～1.95cm。Ａ･Ｂは、口径8.5～9.6cm･底径4.8～６cm･高さ2.1～2.7cmを計る。平均計測値は、ａ･ｂが口径6.65cm･底径4.32cm･高さ1.75cm，Ａ･Ｂが口径9.03cm･底径5.56cm･高さ2.48cmである。カワラケは、内外面ロクロ整形、底部は基本的に回転糸切りであるが、部分的に篦削りや圧痕により糸切り痕が不明瞭なものも存在する。墨書は、一の字の特長から26･31･35･36のやや達筆なもの、27･30･34･37の太い棒状のもの、28･33の片方の端部が先細りとなるものの他に、29･32･38の破損により部分的な遺存の物もある。出土状況から本来の出土位置が保たれているとも考えるが、西側グループの西半分が半円を描く様にも看取される。各カワラケの計測値は第１表にまとめた。

第１表　江子田送り神塚盛土下層出土カワラケ計測表

番号	口径	底径	器高	20	8.6	5.6	2.3	30	9	6	2.5
11	7.1	4.1	1.8	21	8.9	5.2	2.5	31	9.3	5.3	2.65
12	6.7	4.1	1.5	22	9.6	5.7	2.7	32	8.5	5.8	2.5
13	6.6	4.3	1.9	23	9	5.4	2.45	33	6.6	4.7	1.5
14	6.4	4	1.8	24	8.9	5.5	2.1	34	6.7	4.4	1.85
15	6.6	4.2	1.95	25	9.3	6	2.35	35	6.3	4	1.8
16	6.8	4.4	1.9	26	8.9	5.6	2.5	36	6.5	4.5	1.7
17	9.1	5.9	2.65	27	8.9	5.6	2.7	37	7	4.7	1.9
18	9.5	5.5	2.3	28	9.2	5.5	2.65	38	6.7	4.5	1.5
19	8.9	4.8	2.65	29	9	5.6	2.4	計測値は最大値　単位(cm)			



第16図　盛土下層出土遺物

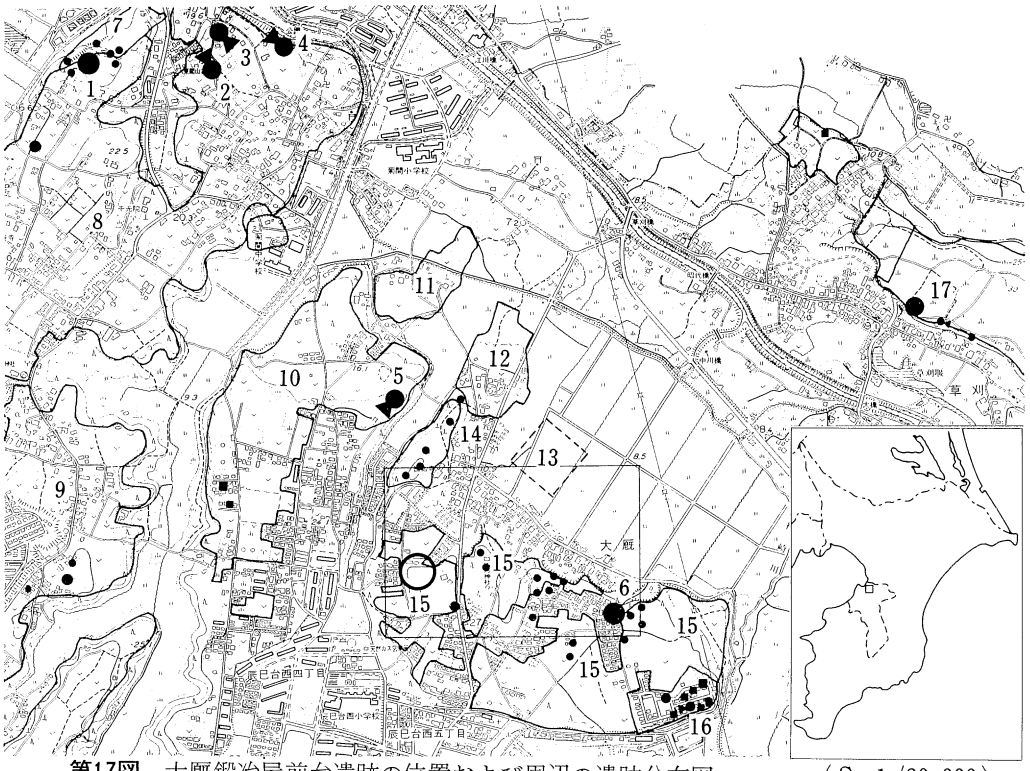
第４章　大厩鍛冶屋前台遺跡

大厩鍛冶屋前台遺跡は、市原市大厩字鍛冶屋前台990番地に所在する。

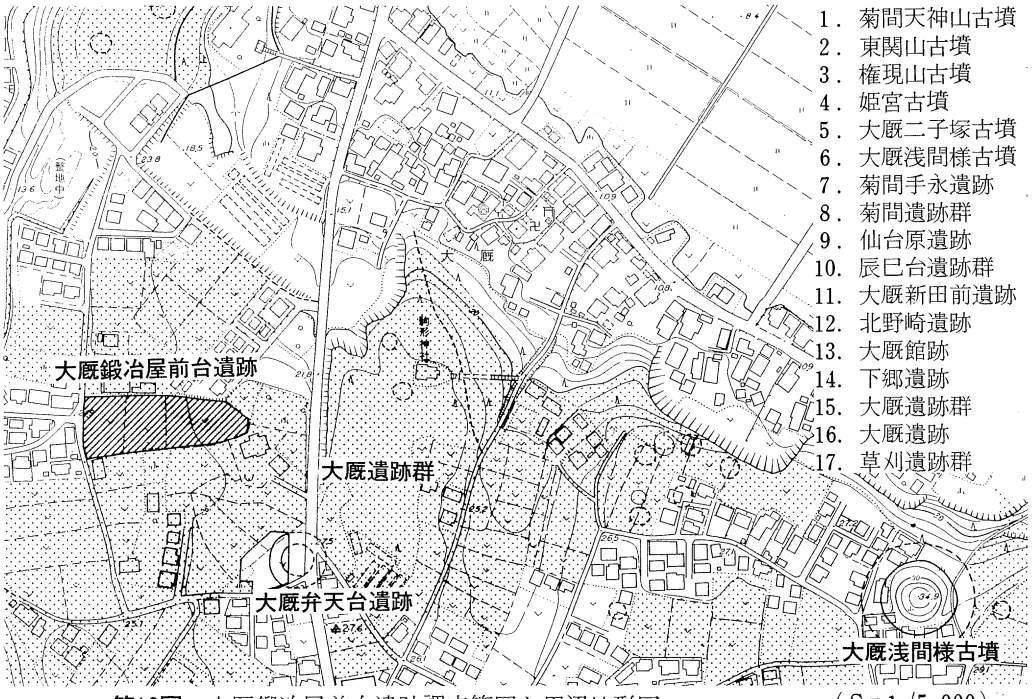
市原市北西部東京湾岸地域は、北に村田川・南に養老川が西流し東京湾に注ぐ、この両河川に挟まれた総延長７kmの海岸平野に面する地域は市原台地と呼称されている。この市原台地西南部の養老川河口右岸の先端部地域には、出現期古墳の神門古墳群・『王賜』銘鉄剣出土の稲荷台一号墳・上総国分二寺などが占地する国分寺台遺跡群が所在する(7)。また、村田川は別名境川とも称され、嘗ては上総と下総との国境を流れ、現在は千葉市と市原市の区分の一つとなっている。本遺跡は、この村田川中流域左岸の台地上に位置し、眼下には村田川の開析した広大な川岸平野を望む標高24m前後の台地上にある。この市原台地北端部にあたる、村田川河口左岸先端部には菊間新皇塚(8)・天神山・権現山・東関山などの大型古墳から成る菊間古墳群が所在し、これより1.5km上流に本遺跡が位置する。

大厩鍛冶屋前台遺跡は、市遺跡分布図では№934の大厩遺跡群中の一角にある。大厩遺跡群は、この中流域左岸の台地上に東西１km・南北0.5kmの広範囲にわたる遺跡で、小字名に見ると西から鍛冶屋前・鍛冶屋前台・弁天台・本郷・坪台・本郷台・川上台・長山・仙元前・赤ホッケ・花輪などの地名が見られる。この遺跡群では、1973～74年の花輪地区『大厩遺跡』(9)・1984年と90年川上台地区『大厩浅間様古墳』(10)・1988年『弁天台遺跡』(11)の調査が行われている。大厩遺跡では、弥生中期宮の台の環濠集落跡や後期集落跡の他、古墳前期～終末期の各時代に渡る前方後円墳・円墳・方墳・帆立貝式前方後円墳や集落跡がある。大厩浅間様古墳は径50mの円丘を測り、大厩古墳群中最大の規模を誇る、主体部副葬品には石釧・珠文鏡・管玉・ガラス玉・琥珀勾玉などがあり、四世紀後葉の大厩古墳群主墳の存在が明らかにされつつある。また、墳丘下から弥生中期方形周溝墓・環濠の存在を思わせるＶ字溝・弥生後期の住居跡などが検出されてる。弁天台遺跡は墳丘の削平された径22.7mの円墳と弥生後期末と古墳前期の住居跡２軒を検出している。以上のように遺跡群での調査面積に対する割合は僅かにすぎないが、調査の成果から当地域は考古学上益々重要になりつつある。

今回の大厩鍛冶屋前台遺跡は、この大厩遺跡群の西辺部の一角を占め、台地縁辺から150mほど内側の奥まった地域で、弁天台遺跡の北西70mの至近距離にある。調査前は現在も耕作の行われる畑である。調査区域は幅29～40m・長さ100mで東西に細長い範囲である。概ね西側が低く東側が高く、比高差は1.5mほどを測る。調査は、範囲内に10m間隔に幅１～1.4mのトレンチを南北に設定することを基本としたが、耕作物や樹木など若干の制約を受けて行ったが、確認調査と言う性格を鑑みると概ね目的は達っせられたものと思う。トレンチは、発掘順に１～18までのトレンチを設け、各トレンチの計測値は第２表にまとめた。

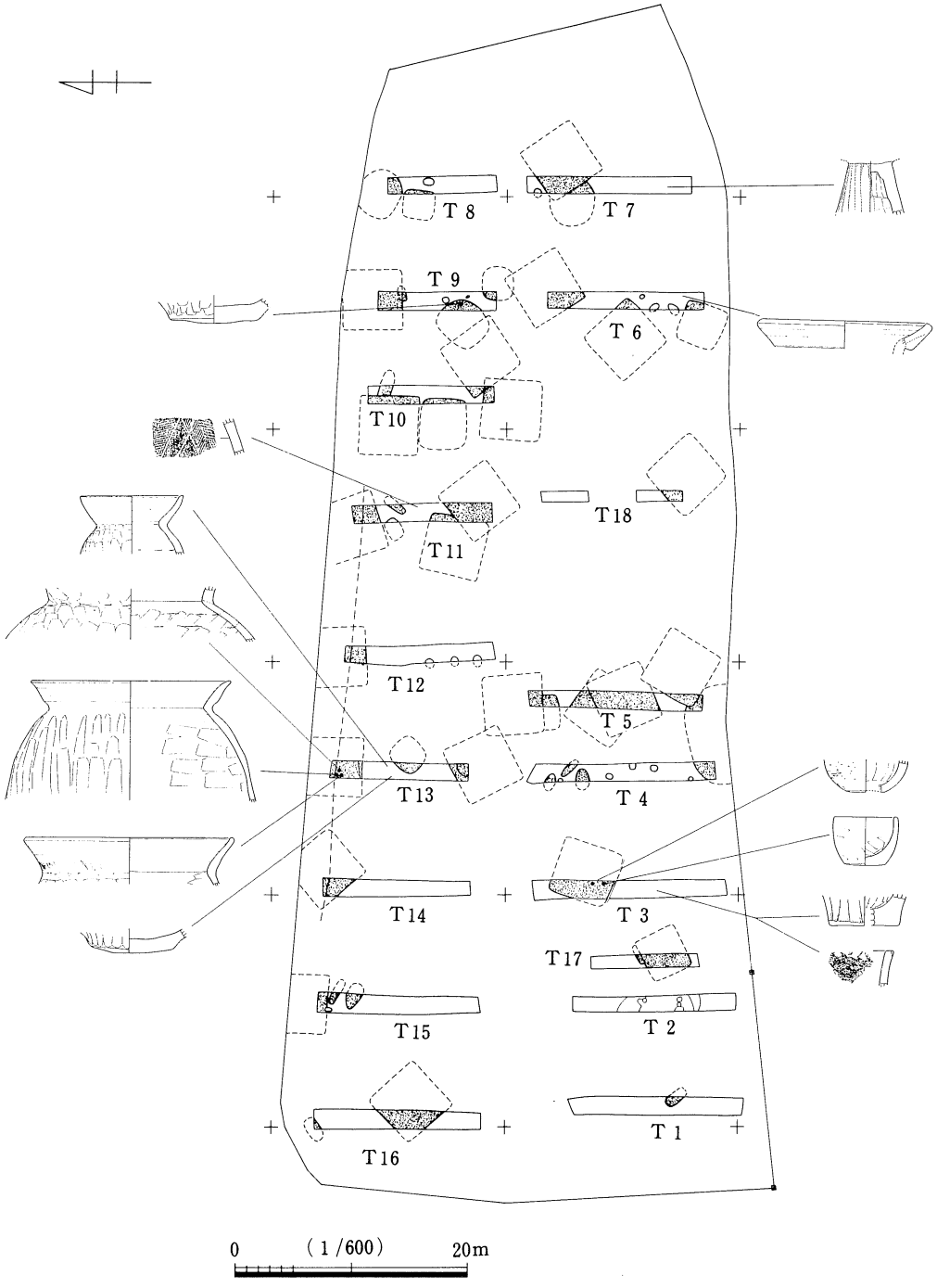


第17図　大厩鍛冶屋前台遺跡の位置および周辺の遺跡分布図　（S＝1 /20,000）

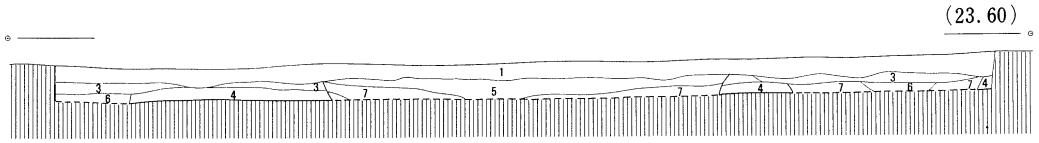


1．菊間天神山古墳
2．東関山古墳
3．権現山古墳
4．姫宮古墳
5．大厩二子塚古墳
6．大厩浅間様古墳
7．菊間手永遺跡
8．菊間遺跡群
9．仙台原遺跡
10．辰巳台遺跡群
11．大厩新田前遺跡
12．北野崎遺跡
13．大厩館跡
14．下郷遺跡
15．大厩遺跡群
16．大厩遺跡
17．草刈遺跡群

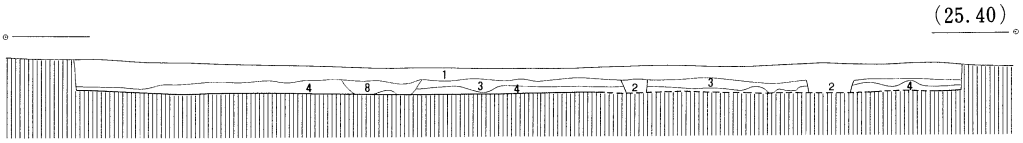
第18図　大厩鍛冶屋前台遺跡調査範囲と周辺地形図　（S＝1 /5,000）



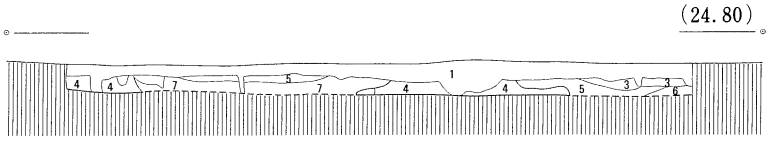
第19図　大厩鍛冶屋前台遺跡全体図



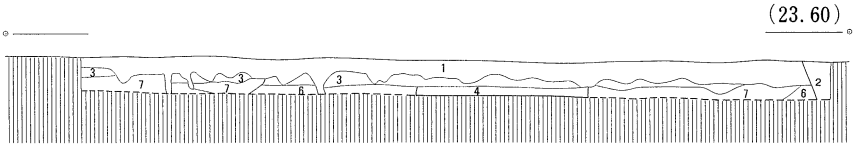
5号トレンチ東壁



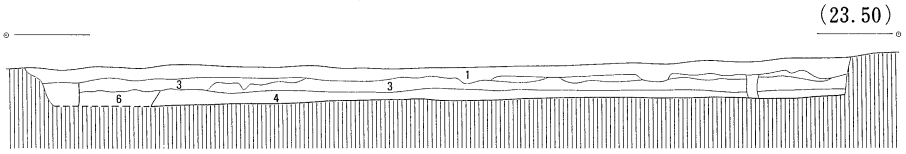
7号トレンチ西壁



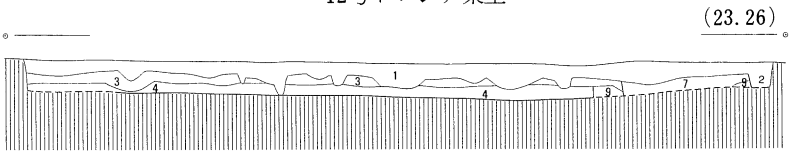
9号トレンチ西壁



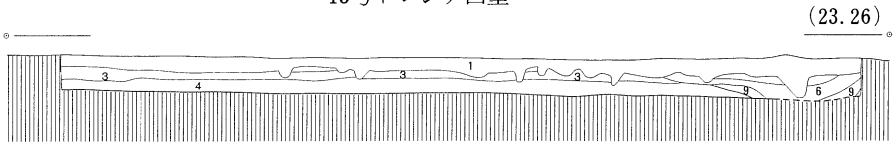
11号トレンチ西壁



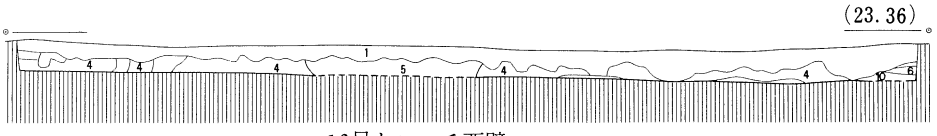
12号トレンチ東壁



13号トレンチ西壁



14号トレンチ西壁

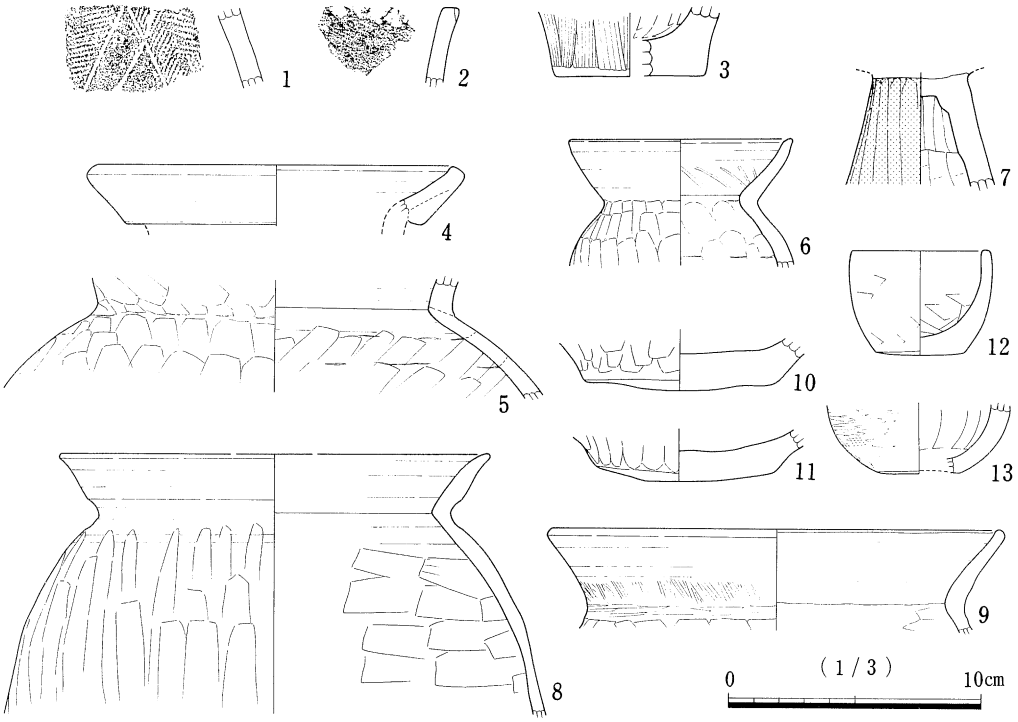


16号トレンチ西壁

0 (1/120) 5 m

1. 黒褐色土層　畑地耕作土および表土
2. 撹乱土層　イモ穴
3. 暗褐色土層　多量の褐色土ブロックを混入
4. 黒褐色土層　多量の褐色土ブロックを混入
5. 黒色土　少量の褐色土ブロックを混入
6. 暗黒褐色土層　褐色土ブロックを混入
7. 暗茶褐色土層　暗茶褐色土ブロックを混入
8. 暗黒褐色土層　ローム粒を含む
9. 黒色土
10. 暗茶褐色土層　ロームブロックを含む

第20図　トレンチ土層断面図



第21図　大厩鍛冶屋前台遺物出土遺物

遺構検出面までのトレンチの深さは、0.38～0.65mを測る。土層は基本的に3層に分けられ、上層から表土の耕作土で汚れた黒褐色土、中層は褐色ブロックの含む暗い褐色土、下層は褐色ブロックの含む黒褐色土、最下層の検出面はソフトローム面である。遺構掘込みの確認層位は中層と下層からのものがあり、2層中に弥生期の生活面か存在するものと思われる。

検出遺構は、住居跡32軒・土壙14基の他、ピットや柱列状の遺構が存在するものの、今回の調査では遺構の発掘を行わなかったため時期の判定は不明であるが、平面プラン楕円形が弥生・方形が古墳時代とするならば、弥生8軒・古墳24軒となり、割合は弥生が25％・古墳75％となる。

出土遺物

出土遺物は総数515点で、小片で判別困難なものもあるが弥生後期41点の8％・土師器472点で92％となる。弥生式土器の中には、2・3の中期宮の台式の土器2点があり、他は後期である。土師器は古墳時代前期の五領式土器の範疇と理解できるものがほとんどであるが、7の様な和泉ないし鬼高式土器の高坏も存在する。

1は、山形状沈線区画内に羽状縄文が転付される、弥生後期の装飾壺胴部小片である。2は、弥生中期宮の台の深鉢口縁部の小片と思われるが、口唇部外面は刻みにより波状を呈し、口唇

端部は平坦である。内外面は、強い磨き状の篦ナデによる。3は、細目の底部片で、外面荒い刷目、内面雑な篦ナデを施し、底径6cm程を測る。弥生中期宮の台の深鉢であろう。4は、土師器壷の複合口縁の小破片で、全体にシャープな作りで内外面強い横ナデにより、口唇部はコの字状を呈する。5は、土師器壷頸部から肩部の破片で1/6を遺存する。頸部と肩部の境の外と内面に継目を残し、やや雑な作りである。内面は継目に強い横ナデ、肩部に削り状の篦ナデ、外面篦ナデを施す。推定頸部径14cmを計る。6は、小型の土師器で頸部1/3遺存する。口縁径9cm・頸部径6cm・現存器高5cmを計る。口縁内外面横ナデ、外面削り状の篦ナデ、内面に凹凸のある雑な篦ナデを施す。7は、土師器高坏脚部片で基部径3.8cm程を計り、1/3を遺存する。外面削り状の篦ナデで、赤色処理を施す。8は、土師器甕で推定口径17cmを計り1/6ほどの遺存である。口縁内外面強い横ナデ、胴内面丁寧な篦ナデ、外面縦位の篦ナデを施す。頸部はより強い横ナデで、僅かに凹面を呈する。9は、土師器甕口縁部小片である。推定口縁径18cmを計り、口縁内外面横ナデ頸部直上に僅かに刷目を施し、口唇部内側に折返し痕跡を残す。10・11は、土師器甕底部で、出っ尻気味である。10は、径7.7cmで、底面は丁寧な篦ナデ、外面篦ナデ、内面雑な篦ナデを施す。11は、内外面やや雑な篦ナデをそれぞれ施し、径7cmを計る。12は、土師器小型鉢で、1/2程の遺存であるが口縁部を僅かに残すだけである。底部は僅かに出っ尻気味で、口縁内外面弱い横ナデ、外面篦ナデ、内面圧っ痕状の篦痕跡を残す。口縁径5.6cm・器高4.2cm・底径3.6cmを計る。13は、土師器小形の鉢で、下半1／3程の破片である。僅かに上げ底気味の底部に球形の胴部を有する。、内面圧っ痕状の篦痕跡を残し、外面強く細かい磨きを施す。底径3.3cm・胴部径7.2cm・現存器高2.7cmを計る。

第2表　大厩鍛冶屋前台遺跡トレンチ計測表

トレンチ番号	長さ	幅	深さ	出土遺物	T10	10.8	1.5	0.53～0.59	±22
T1	15	1.4	0.5～0.52	弥1・±5	T11	12	1.4	0.59～0.62	弥16・±12
T2	14	1.3	0.51～0.63	弥3・±33	T12	12.8	1.4	0.53～0.63	±20
T3	16.5	1.4	0.5～0.61	弥7・±49	T13	11.7	1.3	0.47～0.61	弥3・±101
T4	16.1	1.3	0.46～0.59	±18	T14	12.6	1.4	0.58～0.62	±34
T5	14.9	1.35	0.57～0.6	±40	T15	13.8	1.4	0.42～0.52	±23
T6	13.4	1.35	0.52～0.61	弥2・±16	T16	14.2	1.4	0.46～0.62	±28
T7	14.1	1.3	0.39～0.52	弥5・±26	T17	9.2	1	0.5～0.54	弥1
T8	9.2	1.4	0.37～0.55	±11	T18-A	4	1	0.64～0.7	±8
T9	10	1.4	0.49～0.55	弥3・±22	T18-B	4	1	0.58～0.65	±4

単位(m)　出土遺物は弥生・土師別の土器点数

第5章　ま　と　め

平成4年度の市内遺跡調査で得られた成果は、限られた範囲の調査ではあったが多くの問題をも提起している。特に、本調査を実施した江子田送り神塚では、盛土最下層から火を焚き祈禱したと思われる護摩痕跡と、これらの祈禱に用いられたカワラケ28点を出土し、この土器の中には一の字の墨書土器13点も含まれている。今、祭祀の方法を復元することは困難であるが、この遺構・遺物は、塚の性格・築造時の祭祀ならび時期を考えるに充分な資料を提供するものである。最近市内における塚の調査例が増しつつあり、市内では小草畑棒平の小草畑供養塚・新生荻原野の一本松塚があり、塚構築前の祭祀遺構・遺物が明らかにされつつある。これは面的な完掘を目的とした、古墳の調査方法を塚の調査において採用したからとも言える。

古墳の築造時期を限定するには、副葬品ならび周溝や墳丘からの出土遺物があるときは比較的容易であるが、これらの出土遺物がない場合は、盛土構築前の旧表上ならび旧表中の遺構・遺物の検出が決手となる。今日の古墳調査に際しては、このような墳丘下の調査は普遍的に行われ、また墳丘下の調査ではその古墳等の性格にかかわる重要な遺構・遺物の発見例もある。今日の塚の調査でも、古墳同様な調査方法が望まれると思う。

最後に、今回の調査にあたり快く調査に御協力を頂いた、姉崎の高木芳郎、鶴舞の上野　誠、大厩の竹内　睦氏を始め関係機関に心よりお礼申し上げます。

註

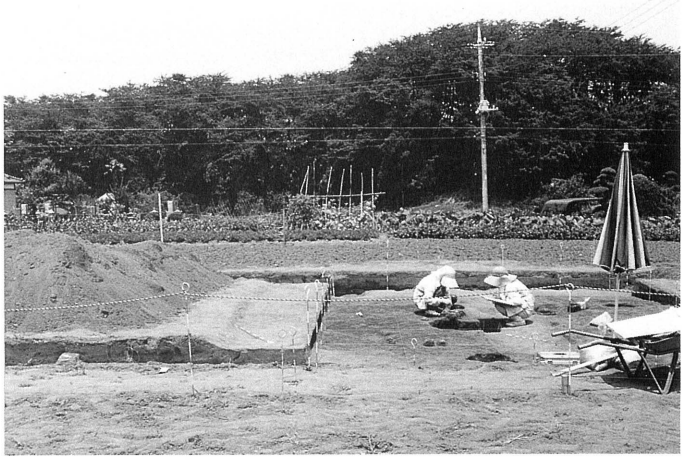
1．高橋康男・木對和紀『市原市姉崎東原遺跡』(財)市原市文化財センター・1990年
2．高橋康男『市原市姉崎東原遺跡B地点』(財)市原市文化財センター・1993年
3．武田宗久「南総町江子田瓢箪塚古墳」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会・1963年
　武田宗久・永沼律朗・永島正春・田中新史『上総江子田金環塚古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会・1985年
4．武田宗久他「上総国女坂1号方形墳」『南総郷土文化研究会業書第9巻』南総郷土文化研究会・1963年
5．倉田芳郎他『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会・1978年
6．金丸　誠『市原市雪解沢遺跡』(財)千葉県文化財センター・1984年
7．田中新史・宮本敬一「国分寺台の遺跡分布調査概要」『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査団・1974年
8．斎木　勝他『市原市菊間遺跡』(財)千葉県都市公社・1974年
9．三森俊彦他『市原市大厩遺跡』(財)千葉県都市公社・1974年
10．浅利幸一「大厩浅間様古墳」『平成2年度千葉県遺跡調査研究発表会要旨』千葉県文化財法人連絡協議会・1991年
11．大村　直『市原市大厩弁天台遺跡』(財)市原市文化財センター・1989年

トレンチ発掘状況
（東から）

トレンチ発掘状況
（西から）

001号跡周溝状遺跡
（南から）

002号跡住居跡
（南から）



調査区から姉崎天神山古墳を望む
（左前方部・右後円部）

1

2

3

4

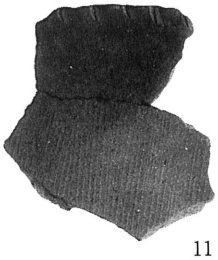
5

6

7

8

9


11

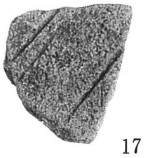
12

13

14

15

16


17

18

19

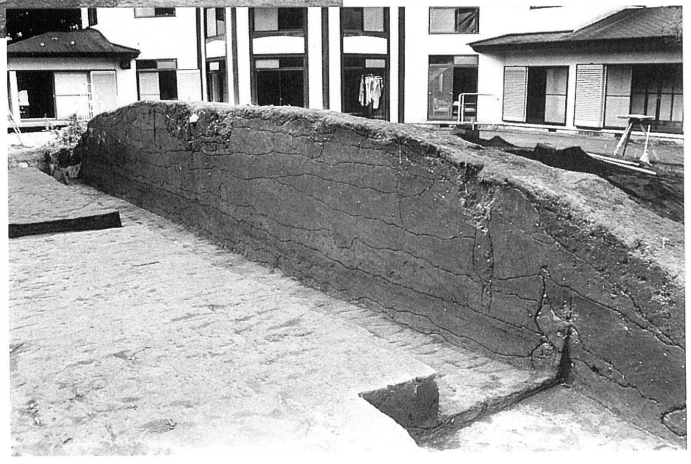
20

21

調査前の盛土
（北東から）

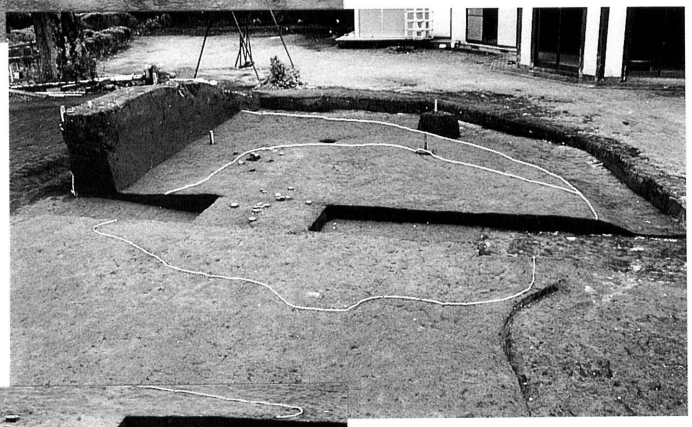
南トレンチ・客土検出状況

盛土全景　（南から）



盛土土層断面

盛土下の状況
（南東から）



盛土下層護摩痕跡検出状況
（東から）

盛土下カワラケ出土状況

11

12

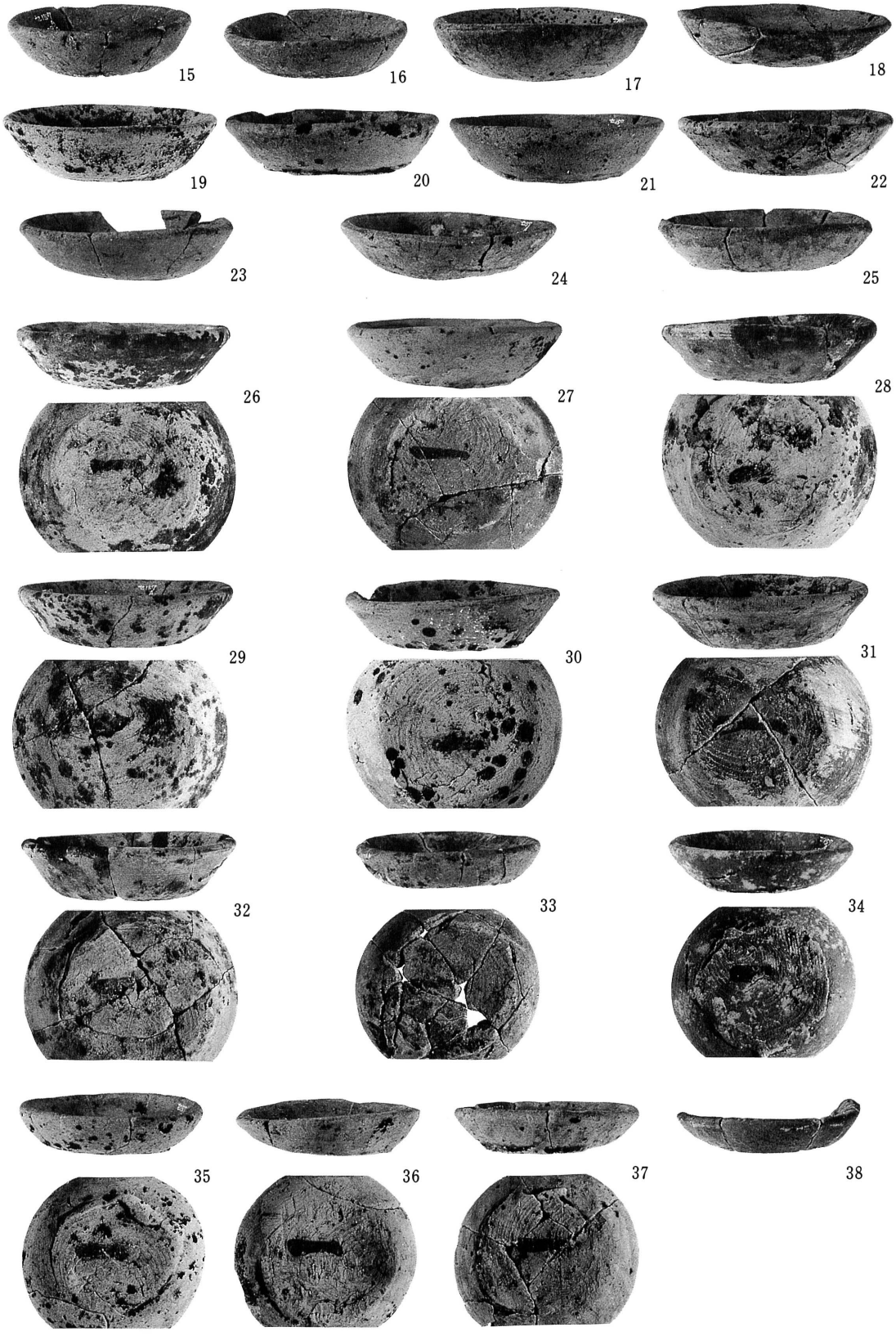
13

14

8

9

10


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

調査前の近景
（西南から）

調査前の近景
（西北から）

トレンチ発掘状況
（東南から）

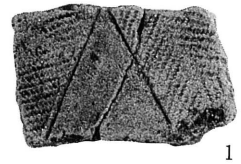
トレンチ発掘状況
（西から）

5 号トレンチ

16号トレンチ

8 号トレンチ

9 号トレンチ

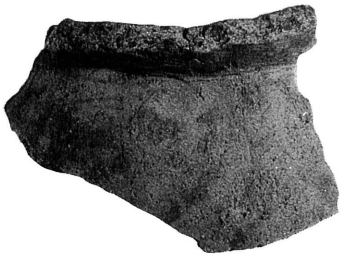


1

2

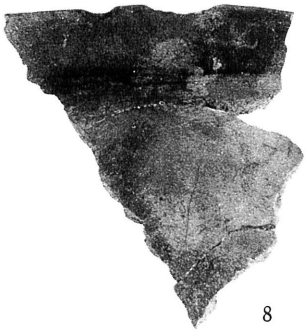
3

4



5

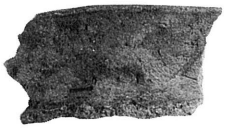
6



8

7

10



9

11

12

13

平成4年度市原市内遺跡発掘調査報告

平成5年3月23日　印刷

平成5年3月29日　発行

編　集　**財団法人　市原市文化財センター**

市原市能満 1489 番地

発　行　**千葉県市原市教育委員会**

市原市惣社 1040 － 1 番地

印　刷　**三陽工業株式会社**

市原市五井 5510 － 1 番地